

## 臨床座談 2022

### ～2つのあいだの陥穽と希望のあいだ～

#### 臨床文藝医学会理事（内科医）

##### dialogue と対話

**学生：**対話というのは dialogue のことで dialogue というのは、di とあるから二人の間に交わされるものと何故か思い違いをしていました。簡単に調べてみた限りでも、dialogue の語源はギリシア語の dialogos でこれは logos（言葉）を dia（通して）という意味のようでした。「対話」のほうは、「直接に向かい合って互いに話をする。また、その話。多くは二人の場合にいう」（精選版 日本国語大辞典）とあります。すると対話と dialogue は別物ということになりますね。どうも訳のほうがまずいのでしょうか。二人というイメージがどうしても湧いてしまいます。

**浮浪者：**二人で話し合うときは対談、三人だと鼎談、四人以上だと座談会などと言いますね。一人で話すときは monologue ですね。

**学生：**monologue-dialogue の対比で考えていたから紛らわしかったのでしょうか。mono、di とくれば1、2と思えてしまいます。

**浮浪者：**それが間違いなのかどうか私にはわかりません。dia には本当に2という意味はないのですか？それほど興味はありませんが。

**学生：**そうですね。あったとしてもそれほど私も興味はないことです。また調べる気になったときに、調べてみようかと思いますが、調べないかもしれません。

**アルバイト：**なぜ dialogue が対話ではだめなのですか？

**学生：**だめだとは思いませんが、対話というと、二人でというイメージが強くなってしまうという気がしました。二者関係は対立をうみやすいと思います。三者は調和ですか？調和ではなく、隷従ということもあるでしょうけど。

**画家：**精神分析の話をしている？転移とか逆転移とか、オイディプスとか二者でも三者でも問題はあるよね。オープンダイアログはいいといいたいの？そうすると開かれた対話というのはいいけど対話という言葉に少し引かかったということ？特に引っ張る内容ではないだろうけど。数が増えると二人や三人のときにあれほど気になっていたことが、問題そのものがなかったかのようになることはあるよね。

**学生**：言葉を通してとか、横切って、というと会話のほうに近いでしょうか。ただ会話というには平坦すぎますね。座談としてみたところで軽すぎる気もします。対話というのは響きとしては一番しっくりきます。ただ二者関係をイメージされると困るというくらいでしょうか。言葉をあちこち横切らせる感じ。キャッチボールではなくあちこちに発散させる感じ。そして回収しない。

**画家**：合意や結論を目指さないということだね。言葉を横切らせること自体が目的であると。

### 意志と選択/強制と自由

**学生**：國分功一郎は『中動態の世界 意志と責任の考古学』の中で意志と選択について書いています<sup>1</sup>。記憶は過去にかかわり、意志は未来にかかわる。選択は過去からの帰結だが、意志は「過去からの帰結としてある選択の脇に突然現れて、無理やりにそれを過去から切り離そうとする概念である」と。国分はアレントと異なり意志に対しては否定的です。選択が意志にすり替えられていると。

**画家**：オープンダイアログは意志ではなく選択を促していると。

**浮浪者**：自由な選択を。

**学生**：意志というのはフィクションですけど、結局意志と自由がセットみたいに扱われていて、脅されているところがあったと思います。意志がないなら自由もないぞと。というのは過去の帰結としてあなたの行動がはじめてから運命づけられているとすれば、そこに主体の場所はないということになるから。スピノザは「自由の本性の必然性に基づいて行為する者は自由である」と自由を定義しているそうです。自由は必然性と対立せず、自由と対立するのは強制であるといいます。

**アルバイト**：強制されていないと思えば自由ということですよ。結局、私達には選択することしかできないし、神様みたいに一から考えて行動することなんてできない。

**画家**：自分の頭で一から考えたという人を私は信用しない。考えたと思っただけで、誰もが歴史を背負っている。心神喪失という考えは意志を

---

<sup>1</sup> 國分功一郎、『中動態の世界 意志と責任の考古学』. 医学書院. 2017.

前提としているね。

**浮浪者**：判断能力があるかないかではなく、自由なのか強制されているのか、と周りが考えるようにしてはどうか、ということですね。自分の行動に対して自由なのかどうなのか。強制されている場合に周りが当人が自由になれるように援助してあげられるようにする、というふうに考えるということですか。

**アルバイト**：私はバイトをしたいわけではないので、私は自由ではないと思います。ただ強制されているわけではない。

**学生**：心神喪失を定義し直すとすれば、当人の行動が強制に向かって振り切れている状態でしょうか。私の行動に私が全く同意できない状態。ほとんど強制されているとしか思われえない状態。そうすれば、社会を守るためではなく、その人の自由を取り戻すために、場合によっては、取り押さえるとか眠らせるとか、力を行使することになる。

**アルバイト**：それは暴力ではないのですか？自由を口実にした。

**画家**：力の行使は行使する人間の敗北宣言に等しいのかもしれない。自由は過去からの選択をやり直すことで取り戻す行為でもあるだろうか。だとすると、私達は本当は何度でもやり直さないといけない。やり直せないと思ったときに力の行使が起こるのかもしれない。

**浮浪者**：武力を持ちたいですか？

**学生**：武力は他者を前提としていますね。オープンダイアログは他者を前提としていない？自己や他者の自由というのではなく、全員の自由というふうに開かれていく、それがオープンダイアログという場なのかもしれない。過去を振り返り、自由を取り戻すために。

**画家**：軍備などというときには、まさに意志と意志とのぶつかり合いをその人は思い描いている。

**アルバイト**：共同幻想を抱くのとどう違うのでしょうか。新興宗教とか自己啓発セミナーとか神秘主義思想なども似ているねと言われるかもしれません。

**学生**：結論とか合意を目指さないというところは大きく違うのでしょうか。信条とか規律があるわけではない。そうした掟の手前まで遡り当事者同士で掟を練り直していく、ということでしょうか。決して掟がないわけではない、ただ掟を前提として話をすすめない、そういうところはだいぶ違うのでしょうか。

**画家：**当事者研究ともリンクしてきそうな話だね。

**浮浪者：**自由を練り直す営みということでしょうか。

### 大地への信頼とナルホイヤ

**アルバイト：**自由と対立するのは必然性ではなく強制、というのはとてもしっくりきます。大地への信頼とナルホイヤという話を最近教えてもらいました<sup>2</sup>。盤石な大地は必然ではありますが、強制ではないですね。ナルホイヤはイヌイットの言葉で「わからない」ということでイヌイットの人たちの決まり文句のようです。

**学生：**その記事は私も読みました。不確実性への信頼というのはオープンダイアログとも通じるところがありますね。最近、高桑和巳の『哲学で抵抗する』という本を読みました<sup>3</sup>。私は読んだことがなかったのですが、『スローターハウス』という小説を紹介していて、その中には「そういうものだ」という言葉が頻出するといえます。

optimisme というのは今では楽観論という意味合いで慣用的に使われていますが、もともと optim- というのはラテン語の optimus に由来するようで、これは「最良の、最善の」ということだそうです。だから optimisme は最良主義とか最善主義ということになる。これは 1937 年に登場した新語だそうです。これはライプニッツの言うところの充足理由律を指すためにでっちあげられた。ライプニッツは、この世界は、「こうであることもできるだろう」という無数の可能性のなかから、最も充足されている最善のものが最も存在理由のあるものとして成立している、ということ充足自由律と呼んでいるようです。すると大きな災害に見舞われた場合どう考えるかという、それも何か理由があると、これが最善であると神が判断した世界が実現しているだけであると、そういう説明になりますね。「そういうものだ」という科白はそうした最善説とか運命論を否定するためのものであると高桑は言います。「そういうものだ」は、そのつど、「そういうものなはずがない！」という、怒りと悲しみのないまぜになった無言のメッセージを伴っていると。

**画家：**「そういうものだ」には信じていたものを、幻想を壊された人間の悲

---

<sup>2</sup> 伊藤亜紗・角幡唯介、『ケアと狩りから考える「わからなさ」ゆえの信頼』。朝日新聞。2022/01/01。

<sup>3</sup> 高桑和巳、『哲学で抵抗する』。集英社。2022。

しみがにじみ出ていそうですね。ナルホイヤは最初からこの世界が最善であるとは信じていない、ただただ大地は盤石だが不確実なものであり自分たちにはどうすることもできない作用がおよぶことがある、という意味では下手な幻想を持たないようにシステム化されているともいえるか。幻想を抱かなければ不安もない。ナルホイヤの精神が信じるのは確実性、最善性ではなく不確実性であると。

**浮浪者**：いつ死ぬかもわからない。いつ病むか死ぬかはナルホイヤ、いつ病み、いつ死んでも、そういうものだ。

**アルバイト**：たとえばPTSD、心的外傷を患った場合には「そういうものだ」という態度が慰めになるのでしょうか。いじめ・虐待を受けた、レイプを受けた、被災を受けた、それも最善であると、そういう幻想に縛られた世界はあるし、そうした事を経験した人も元々はその世界に生きていた、だからこそ、生存者罪責感とかいじめられるほうにも理由があるとか、そういう感情を抱かされてしまうこともあるのかもしれない。どうして災厄に見舞われたものが罪の意識を背負わなければならないのか。その根源には災厄に見舞われるほうにも見舞われるだけの理由があるに違いないという、最善説・運命論的な見方や幻想があると思う。

**学生**：「そういうものだ」は慰めになるかもしれませんがね。彼女や彼らが悪いわけではない。そんな夜道を歩いていたからいけないとか欲情をかきたてるような恰好をしているのも悪いとか、僧侶が興奮するから女性はスカートを履いてはいけないとか、最後はちょっとついでに勢いで出てしまいましたが、そんなのは理由にはならないでしょう。それでは他ではなくなぜ私が、ということの答えが、要するにあなたが他の誰よりもそうであったから、ということにならなければならないがそんなわけがない。

### 最善説の効用・効能

**アルバイト**：それではそんなろくでもないものにみえる最善説とか運命論ってなんのためにあるのでしょうかね。

**画家**：神は乗り越えられない試練は与えないとかそれが運命である、ということが救いになることもあるだろうね。どうして私はこんなにも貧しいのかと。それはそういう運命だからと。そう考えると諦めがつく。

**アルバイト**：諦めさせるという効果がある。無駄な争いをしなくてすむと。たとえばアイドルとか女優と喧嘩しないように。彼が女優が好きだといって

も、張り合ったりしない。歴然とした差があると感じているから。

**画家：**その歴然とした差を確固たるものと思わせる効果があるということだろうね。妬み嫉みをうまないために。

**学生：**神のもとにトライアングルを形成する。彼女はあなたとは違う、を保証する神ですね。彼女には彼女の私には私のギフトを神は授けられたのだ、ということでしょうか。その差は歴然としているようにみえるけれどそれには何か最善の理由があるから仕方がないと。

社会は変えようがないという意識のもとでは、運命論はある種の救いというか慰めになるかもしれませんがね。ただ権力者にとっては好都合な慰謝であるともいえるかもしれませんが。

**画家：**だから私は本当はあなたなのだ、私がいるべき場所にあなたがいると思いなしある女優を殺してしまう、そのような場合彼女が抵抗しているのも最善説・運命論と言えるかもしれない。幻想を抱くことができなかったということ。

**アルバイト：**幻想に対抗できるのは幻覚や妄想？

### 抵抗としての幻覚・妄想

**学生：**幻覚、妄想について少し確認させてください。定義は面白くないですが、一応確認しますと幻覚は「対象のない知覚」、妄想はDSMの定義では、「外部の現実に関する不正確な推論に基づく誤った信念 (belief) であり、他のほとんどの人が信じていることに反しているにもかかわらず、また議論の余地のない明白な証拠や反証にもかかわらず、強固に維持される。その信念はその人の文化や下位文化の他の成員が通常受け入れているものではない(すなわち、宗教的信条ではない)」(DSM-5)ということになります。

**アルバイト：**DSMはローマ数字が読めない人がいるだろうとのことでDSM-5からアラビア数字に変わったらしいが、どんだけバカな理由なんだということをおっしゃってる方もいますね。

**画家：**柴山雅俊は解離性幻聴と統合失調症の幻聴の違いについて述べています<sup>4</sup>。解離性同一性障害にみられる幻聴は頭の内部から聞こえるのに対し、統合失調症型幻聴では外部から聞こえるとされるが実際にはそうとはいえない

---

<sup>4</sup> 柴山雅俊. 『解離性障害—「うしろに誰かいる」の精神病理』. 筑摩書房. 2007.

と。解離では若干内部からの声が多いという程度の印象で、むしろ声が内部からか外部からかの質問に解離の患者は比較的苦勞なく答えられるのに対し、統合失調症の場合はそうした質問には困惑すると。解離の患者の世界はわれわれと同じような区分がまだ保たれている。「解離性幻聴は感覚的にありありと、短い言葉で、明瞭な意味をもって現れることが特徴である」（柴山）。「世界の知覚的対象は、離人症のように、表象化・疎隔化され、現実感がなくなる。また逆に表象は知覚的対象のように形象化され、ありありと幻覚として体験される」。

「統合失調症の幻覚は、感覚的要素が乏しく曖昧であってもその意味は過剰であり、感覚と意味の間に奇妙な断裂や矛盾がみられる。幻聴の内容には意外性、未知性が含まれており、解離性幻聴のような自分の思考、表象との連続性、つまり既知性はみられない」。

**アルバイト**：解離の幻聴は聴覚性のフラッシュバックとも考えられますね。過去に実際に言われた言葉が突如去来する。

**学生**：解離では自我の守りが弱くなっているといえるのでしょうか。だから侵入してくる、それでも統合失調症のようにラカン風にいえば象徴界が完全に壊れているというわけではないから私たちも「了解可能」な範疇とされる。

**画家**：「了解可能」とか「病識がない」とかいう言い回しはそろそろ死語にしたいところだね。

**学生**：幻覚や妄想が抵抗であるとする場合それが指すのは解離性のそれではないでしょうね。解離は幻想を壊されたとしても、その幻想の骨格は維持している、といえそうでしょうか。PTSDでまだおしゃべり療法が有効なのは言葉のレベルでまだ立て直しが効きやすいということですよ。

**画家**：統合失調症で立て直しがききにくいかどうかは別にしてね。

**学生**：少なくとも同じ世界を共有している、という意識は働きやすい。

**浮浪者**：天理教の教祖の中山ミキは平凡な農夫にみえたが、忍苦が限界を超えた時、変貌した<sup>5</sup>。仁王立ちになり「われは天理王命なるぞ」と宣言したという。「嫁」に天理王命の礼拝を命じられた家族が呆れて断ると彼女は断食を始め、二日目に夫が最初に彼女を拝んだ。ミキはそれだけでは満足せず、一家全員の礼拝を要求し、さらに自宅に縄をかけて引き倒すことを命じた。その通りになった。ミキは一家が文字通り無一文になることを求めた。

---

<sup>5</sup> 中井久夫、『治療文化論：精神医学的再構築の試み』、岩波書店、2001。

**学生：**中井久夫は宗教は創始せず、短期の治療をうけて家庭婦人に戻ったというミキと同様の例も挙げていますね。彼女は「われは普賢菩薩なるぞ」と宣言して家族に礼拝を求めたという。そして夫は礼拝した。

**アルバイト：**彼女を礼拝できる夫のやさしさは今では当時以上に稀有なものでしょうね。

**画家：**周りが見放さないことだね。

**学生：**中井久夫も「おそらく近代文明、より正確には西欧都市文明において欠如しているものの顕著な特徴は、病者の尊厳性（ディグニティ）である。そして、ある種の自然な了解性である」と書いてますね。

**アルバイト：**近代文明のほうにこそ了解性が欠如しているのですね。

**学生：**「創造の病い」（エランベルジェ）は、抑うつや心気症状が先行し、「病い」を通過して、何か新しいものをつかんだという感じとそれを世に告知したいという心の動きと、確信に満ちた外向的人格という人格変容を来たす過程である、といます。

フェヒナーはうつ病、フロイトは神経症、ユングはほとんど分裂病に近かったであろうと中井はいいます。ウェーバーは重症うつ病、ウィーナーは肺炎に起因する症候性精神病だったそうです。

また、中井は「創造の病い」においては何らかの形の意識混濁あるいは変容が伴うといます。その理由は、それなくしては、過去と現在と未来とが一望の下に見えるような、そして、その中で、創造的な仕事の条件である「思いがけないものの結合」が起こらないからであろうと。

**浮浪者：**「はるかな過去の個人的な心理的外傷がつい昨日のここのように切実に、そして臍部までくっきりと鮮やかに思い出される」ような「パノラマ現象」ですね。

**アルバイト：**この幻想の占める世界への抵抗として、幻覚や妄想が一役買うこともありそうですね。

**画家：**創造は幻想を一度横切る必要がある。

### パノラマ現象と而今の山水

**学生：**このような話では而今の山水も思い起こされますね。

「老僧、三十年、未だ参禅せざる時、山を見るに是れ山、水を見るに是水なりき。後來、親しく知識に見えて箇の入処有るに至るに及んで（すぐれた師にめぐり遭い、その指導の下に修行して、いささか悟るところあって）、山

を見るに是れ山にあらず、水を見るに是れ水にあらず。而今、箇の休歇の処を得て（いよいよ悟りが深まり、安心の境位に落ちつくことのできた今では）、依然（また最初の頃と同じく）、山を見るに祇だ是れ山、水を見るに祇だ是れ水なり」（吉州青原惟信禪師）<sup>6</sup>。

井筒俊彦が『意識と本質』の中で述べているように、分節（Ⅰ）→無分節→分節（Ⅱ）といった分節化と脱分節化のプロセスがここにはあるように思います。分節（Ⅰ）の手前には幼児的万能感の世界、絶対無分節の状態が遡及的に措定されている。ここでいう無分節はラカン風にいえば象徴界の穴、世界の根拠のなさが露呈する場所といえるのでしょうか。根拠律の根拠が不在である、このことが生成のプロセスの際限のない持続を保証する。分節（Ⅰ）→分節（Ⅱ）というプロセスが通常の神経症の分析を通じて経験されることだとすれば、分節（Ⅰ）→無分節→分節（Ⅱ）は真理捏造（創造）のプロセスに関わる。

**画家：**ラカンも幻想を横切り、分節（Ⅰ）→無分節→分節（Ⅱ）という而今の山水のような経験を精神分析に導入したかったのかもしれない。しかしたいていは失敗していたようにみえる。アルトーの名を出すまでもなく。

**アルバイト：**「創造の病い」を疑似的に経験させたかった？

**画家：**だから統合失調症とは相性が悪い。フロイトやラカン派の精神分析は統合失調症に対しては一般的にはしてはならない。悪くなるから。そもそも分節（Ⅰ）にいない人を分節（Ⅰ）にいるものとみなして一緒に横切りましようとしてもうまくいくわけがない。ラカンやフロイトはH・S・サリヴァンや中井久夫に比べ統合失調症の治療経験が圧倒的に不足しているという印象を受ける。下手くそかとおっこみを入れたいくなる。ラカンもフロイトも面白いところはめちゃくちゃ面白い、ただ面白くないところは本当に面白くない。

**学生：**ラカンは良くも悪くもやはり構造論的で、想像界、象徴界、現実界というのは方便としてはわかりやすいけれど、実際にはそれほど明確に区別できるものではないでしょうね。またこのような構造論にはバックグラウンド（個人の歴史や大文字の歴史）や時間経過への視座が欠けている。

**画家：**歴史とプロセスへの視点だね。

**学生：**やはり歴史もプロセスも軽視せず、理論にも経験にも偏りすぎずバランスがとれていたのは中井やサリヴァンだったと思います。中井久夫以上に

<sup>6</sup> 井筒俊彦、『意識と本質—精神的東洋を求めて』。岩波書店。1991。

精緻に統合失調症の寛解過程を描いた精神科医を私は他に知りません。

### オープンダイアログと精神分析

**アルバイト**：オープンダイアログはどうでしょうか。統合失調症の治療として効果をあげ最近注目されておりますが、精神分析との違いはどこにあるのでしょうか。

**画家**：分節（Ⅰ）つまり幻想ありきで始めないということでしょうか。

**浮浪者**：開かれたところから始める。

**学生**：また、分節（Ⅱ）、合意、結論も目指していない。

**アルバイト**：それではどこへ行きつくのか。

**画家**：分節（Ⅱ）は目指さずとも析出せざるを得ない。個人に閉ざされた分節（Ⅰ）から開かれた場（無分節）を通じて、個人としてではなく、関係者全体の分節（Ⅱ）へと行きつく。これは個人の変容というより関係者全体が変容するということ、生成変化の場に立ち合うということ。

**アルバイト**：宗教のように前提される分節（Ⅱ）はないが、個人の分節（Ⅰ）とその他の関係者の分節（Ⅰ）をそれぞれ横切らせることであらたな分節（Ⅱ）を形成していくということですね。

**画家**：もっと大きな規模でこれができれば世直し、革命にもつながるだろうという考えもあるだろうが、おそらくこれは数は増やせないだろうね。もしこうしたオープンダイアログ的な語りの場を広げるためにはどうすればいいか。ドゥルーズのいうようなリゾーム（根茎）式に地下茎の結びとしてなら広げていくことはできるかもしれない。

**アルバイト**：要するにオープンダイアログ的な語りが世界全体に及べばみんなハッピーになるだろうと。

**学生**：最近インターネットも発達してオンライン会議などでもできるようになっていますが、そうした形で数を増やしてオープンダイアログのような語りの場を実践しようとしてもうまくいかないでしょうね。

**画家**：オンラインでないとしてもまず数が多すぎると双方向的なやりとりが難しくなる。座談会といっしょで3、4人、せいぜい指で数えられる程度の数が限界に思える。

**アルバイト**：短期記憶として保持できる数は7±2程度として7はマジックナンバーと言われることがありますが、だいたいぱっと記憶できる程度の数でしょうか。

**学生：**大島弓子の漫画『綿の国星』に出てくるチビネコは細かい話は忘れましたが、数字が3つくらいまでしか覚えられなくて、4つ以上のものを数えるときには3つが4つなどと数える。三進法なわけですね。いずれにしても覚えられないから、便宜のためにもある程度の数で括らないといけない。

**画家：**ほんとうの共同体の形成を考える際には、だからそうした生物としての限界にも留意してせいぜい十進法的にもの言うしかないのだろうね。多くなりすぎると、ただのカリスマ政治や恐怖政治になってしまう。それは分節（Ⅱ）ありきの政治でそれはよい共同体とは言えないだろう。

**学生：**もう一つ気を付けなければいけないと思うのは、無分節から始めるのは無分節を目指すことではない、ということでしょうか。あくまで出発地点がそうであるというだけでそこに留まることがよいわけではないし、そもそも原理的に留まることはできない。

**アルバイト：**無分節というのもある種の方便ですね。

## 開かれ

**学生：**ジョルジョ・アガンベンの『開かれ』<sup>7</sup>から少し引用します。

……「存在、世界、開かれは、環境や動物的な生とくらべてみても、それと異なるものではない。つまり、それらは、生物とそれを抑止解除するものとの関係の中断や膠着にほかならないのである。開かれとは、開かれざる動物の捕捉にほかならない。人間はおのれの動物性を宙づりにし、そうすることで、生が例外領域へと勾留され置き去りにされる＝追放されるような、「自由で空虚な」領域を開くのである。

……まさに、動物的な生を宙づりにし生け捕りにすることによってのみ世界が人間に対して開かれるために、存在はつねにすでに無によって横断されている。開かれは、すでにしてつねに無化なのである。

ここでアガンベンはハイデガーの「開かれ」の概念を参照しています。

**画家：**アガンベンはヤコブ・フォン・ユクスキュルの環世界（ウムベルト）に触れているね。

---

<sup>7</sup> ジョルジョ・アガンベン、『開かれ—人間と動物』、岡田温司・多賀健太郎（共訳）、平凡社、2011。

ユクスキュルは「無限の多様性をもった数々の知覚世界を措定」した。「一元的な世界が実在しないのと同様、あらゆる生物にとって等質な時間も空間も存在しない」と。

ユクスキュルはわれわれが生物の活動を見ている客観的空間としての環境を、一連の大小の豊かな諸要素によって構成される環世界から慎重に区別している。

動物の関心を惹く唯一のものである諸要素をユクスキュルは「意味の担い手」ないしは「知覚標識の担い手」と呼ぶ。

「環世界とは、これを観察する視点の取り方しだいで変化しうるようなもの」である。

**学生：**ユクスキュルが「意味の担い手」、「抑止解除圏」と呼んでいるものをハイデガーはここで「抑止解除するもの」と呼んでいます。

聞いたことがある方もいるかもしれませんが、ダニの環世界はたった三つの意味の担い手もしくは標識の担い手に還元されるとユクスキュルは言います。(1)すべての哺乳類の汗に含まれている酪酸の匂い。(2)哺乳類の血液と同じ37度の温度。(3)総じて、体毛を具え毛細血管に覆われている哺乳類に特有の体皮の類型、と。

つまりダニは人間を認識して血を吸っているというつもりはないのです。ただ酪酸の匂い、37°Cの温度などを刺激として受け取り行為しているだけだということです。

### ダニの18年

**学生：**ユクスキュルはロストックの実験室で、18年ものあいだ、餌もないのに、つまり、環境から完全に隔絶された状態で、一匹のダニが、生きのまま飼われていた、という逸話を披露します。

その「待っている期間」、ダニは「われわれが毎晩体験しているのと似た一種の睡眠」状態にあったのだろうとユクスキュルは推測し、「生きる主体を抜きにして時間は存在しえない」という帰結を導き出します。

**画家：**ハイデガーは倦怠の第一の契機を「空虚のままに残されてあること、空無への放置」、第二の契機を「宙づりのままに保持されてある」こととしている。

要するに、この刺激から隔絶された宙づりのダニと退屈を感じている人間は結局何も変わらんと。

**学生：**「退屈した人間は、動物の放心に一たとえ表面的ではあれ『酷似』するようになる。人間の倦怠も動物の放心もともに、もっとも本来的な身振りにおいては、閉ざされに開かれているのであり、執拗に拒まれているものに完全に譲り渡されているのである」。

**画家：**アガンベンはまだベンヤミンを引用し技術というものは「自然を支配することではなく、自然と人類のあいだの関係を支配することだ」という。

**学生：**自然と人類のあいだ、動物と人間のあいだ、この「自由で空虚な」領域が開かれですね。

### 倦怠と不安

**画家：**倦怠は「根本的気分のようなものであり、本来的な意味で現存在を構成するもの」であり、「『存在と時間』で論じられる不安は、この倦怠に対する一種の回答、あるいは、送り返された反作用のように思われる」とアガンベンは書いている。

倦怠・退屈から人は目を背けようとする、できるだけ遠ざけておきたいと思う。不安は倦怠が顔をのぞかせてきそうになったときに現れる情動ともいえるだろうか。

**学生：**あいだの統御法がテクノロジーでしょうか。オープンダイアログはあいだを開き直す。

**アルバイト：**私は小学生の頃にプールの脱衣場で着替えをしているときや自宅でテレビゲームをしているときに突如、虚脱感に襲われたことがありました。私は何をしているのだろうと。生きている限り避けられないがゆえに何気ない瞬間に倦怠に落ち込むことがあるのでしょうかね。

**画家：**だからといって、倦怠から目を背けず浸り続けなさいということではできないわけで。

**学生：**だからといって、誰もが突如として経験し得るその倦怠の瞬間を忘れていいわけではない。

**アルバイト：**18年間隔絶されたダニと倦怠・退屈の最中にある人間はいずれも半分閉じ半分開いている。閉じているのが動物的で開いているのが人間的というのは見方によるのですよね。

**学生：**そうですね。リルケとハイデガーでは反対の意味になるとアガンベンも指摘していますね。真理のヴェールについて云々するのであればハイデガーのように人間のほうが開いている、というようにしておきたいのでしょう

けど、リルケのように人間のほうが閉じており動物のほうが開いている、というほうがしっくりくる方もいるでしょう。

**画家：**開いているというのをさくらかもこのコジコジのような存在に見るか、ハイデガーとかヘーゲルのような真理のヴェールを剥がす側に置くかという違いでしょう。

## 世界と大地

**学生：**もう少しアガンベンの『開かれ』から引用させてください。

人間と動物、世界と環境のあいだの関係は、世界と大地の内部抗争を呼び覚ますように思える。

もし世界が、作品において開かれを表すとすれば、大地は「本質的にそれ自体のうちに閉ざされているもの」を名指している。「大地が立ち現われてくるのは、あらゆる開示を前にして後ずさりすることで、たえず閉ざされたままに保たれるような、本質的に<露顕されえないもの>として、見守られ保護される場合にかぎられる」。芸術作品において、この<露顕されえないもの>そのものが白日のもとに曝される。「作品は、世界の開かれのもとに大地そのものをもたらし保持する」。「大地を算出するということは、<自己の内に自己を閉ざすもの>としての大地を、開かれのうちにもたらすことなのである」。

世界と大地は、本質的にたがいに異なるが、けっして切り離されてはいない。世界は大地に基礎を置き、大地は世界をつうじて生起するのだ。

以上です。

**アルバイト：**世界と大地は表裏一体というか表を歩いているかと思っただけならず裏返っているというメビウスの輪のようですね。

**画家：**どちらが先というわけではなく相互補完的であると。

**学生：**神のような超越的な存在から一方的に大地より世界を形成するわけでも超越論的な思念から、つまり世界から大地を表象しつくすわけでもない。

## 時間を忘れよ

**アルバイト：**2021年の『臨床文藝』の中にカルロ・ロヴェッリ『時間は存在

しない』という本が紹介されています<sup>8</sup>。カルロ・ロヴェッリは理論物理学者で「ループ量子重力理論」の提唱者の一人です。少し引用します。

著者によると時間は存在せず、世界は物ではなく出来事のネットワークである。事物は存在するものではなく、起きるものである。「この世界について考える際の最良の語法は、不変性を表す語法ではなく変化を表す語法、『～である』ではなく『～になる』という語法なのだ」。この世界は出来事、過程の集まりである、時間や事物があると思うのは私たちの視点がぼやけているからであると。ぼやけている私たちは痕跡を残す。痕跡のネットワークが記憶、過去をつくり、未来を予見させる。

**学生：**ドゥルーズを思わせませぬ。

**アルバイト：**"Forget time"という論文で彼は数式を用いて、ミクロな視点からは時間は消えることを説明しています<sup>9</sup>。数学は得意ではないので細かい計算は私にはわかりませんが。

"Time is, that is to say, the expression of our ignorance of the full microstate."

時間は私たちが完全にミクロな視点からは物を見ることができないという事実の証左でしかないということでしょう。

「大地は世界をつうじて生起する」とハイデガーが言うときの大地が受けている制約もこの時間と同じものなのだと思います。カルロ・ロヴェッリの時間を大地と言い換えてもそれほど違和感なく受け入れられる。

### いまがその時間

**学生：**高桑は前述の『哲学で抵抗する』の第5章でマーティン・ルーサー・キング・ジュニアを取り上げています。白人聖職者たちはキングたちの活動を「懸命でもなく、タイムリーでもない」と述べた。それに対しキングは「私たちは、正しいことをおこなうためには時間はずねに熟している、ということを知っています」、「いまがその時間です」と言います。キングはパウロの時間論（終末論）を参照しているようです。「コリント人への第一の手紙」に「時間は収縮している」という表現があるようです。パウロが聖書から拾い上げたのはこの時間感覚のようです。

---

<sup>8</sup> 臨床文藝医学会理事。「祝祭と零れ落ちたもの」．『臨床文藝』1(2021): 14-20.

<sup>9</sup> Rovelli, Carlo. "Forget time": Essay written for the FQXi contest on the Nature of Time. Foundations of Physics 41 (2011): 1475-1490.

**アルバイト**：時間はでっち上げなのですね。だから延ばそうと思えばどこまでも延ばせる。そして時間は生起するときには一挙に立ち上がる。だから公民権運動で徐々に変えましょうというのは論外でしょう。それは変えないことと同じなのですね。時間が生起するときは現在も過去も未来も同時に生起する、時は徐々にということはない、一挙に起こる。徐々に、というときは世界は、時間は、微動だにしていないと思ったほうがよいでしょうね。

### あいだの両義性

**浮浪者**：すっかり眠っていました。それでもお話はだいたい聞いていたと思いますが。そろそろ日暮れの様ですね。

**画家**：動物と人間、大地と世界のあいだ、「自由で空虚な」領域とは両義的なものと考えてよいだろうね？

**学生**：アガンベンの振舞いもその両義性に由来するものでしょうか。一方にバートルビー的な無為の称揚があり、他方に剥き出しの生、ホモ・サケル（聖なる人間）への警鐘がある。もちろん潜勢力とはそういうもので、あいだは変革の種であり同時に世界の外である。ラカン的な言い方をすれば、対象aでしょうか。世界から零れ落ちた残滓、残余としてのあいだの領域。

**アルバイト**：ホモ・サケルから他でもあり得たかもしれない可能性が想起される、その希望がバートルビー的な生であったりすると。

**画家**：ただやはり、バートルビーは現代で言えば、ひきこもりとかニートが近いかと思うけど、そのように生きよ、というわけではない。皆がそのように生きられるわけでもない。

**学生**：ではどうしたらいいの、というところがどうしても弱いようにみえますね。

**画家**：生きよという生政治に対し、だったらよ死ねとは言えないわけだよ。コロナで死んだら死んだでいいじゃないのという見方もある。ただアガンベンはコロナは本当は大したことはない、それなのに政府はこの例外状態をうまく利用しようとしている、というわかりやすい陰謀論めいた主張から始めてしまった。本当は彼の理路からすればコロナの致死率が大きいたことがあろうがなかがろうが問題ではなかったはずではないか？

**学生**：わかりやすい言説が危ういのは望まぬほうへ傾斜してしまうから。思いもよらぬ人たちの賛同を得てしまったりすることがある。

**浮浪者**：名郷直樹は『いずれくる死にそなえない』の中で定年など自分のな

かでここまできたらあとは死んでもいいやみたいなラインを決めたほうがいいのじゃないか、というようなことをいう<sup>10</sup>。「どこかで厳しい治療は捨て去って、ほどほどの治療で食事やおやつを楽しむほうが、幸せなのではないか」と。「死を避ける社会」から「死をことほぐ社会」へという言い方をしていますね。

**アルバイト**：ただ定年までは結局頑張らないといけないのか、という見方もあるでしょうね。なんならずっとごろごろしていたいと。

**浮浪者**：蟻は働き者などと言われることもあるけど、実際にはたいてい何もしていないようですね。ふらふらしているだけで。

**画家**：そんなに働かなくても普通飯は食えるわけで。わざわざ貧しくして、さあ働けさもなくば飯は食えないぞ食わせないぞというわけですよ。「クソどうでもいい仕事」が増えていると言うね。

**学生**：「あいだ」というのはラカンぼく言えば欠如の不在のことですね。不安は欠如が欠如しに来るときに出来ると<sup>11</sup>。欠如、穴がなくなりそうになると、危険信号として不安という情動が発動する。不安は人間の側、社会の側へその人を引き戻そうとする作用ともいえますかね。「不安は、この倦怠に対する一種の回答、あるいは、送り返された反作用のように思われる」とアガンベンもいうように、不安という情動の手前に倦怠・退屈という事態がある。「あいだ」が顔をのぞかせるときですね。人間は普段それを気晴らしでやり過ぎているし、動物なら抑止解除に従っているがふとした瞬間にそれが宙づりになるとあいだの領域が現れる。だから例外状態として本来はあるはずなのですが、それがあある種常態化してしまっている。その結果としてあいだの領域であるはずのものが当たり前のように転がっている。植物状態の人間、呼吸器や人工心肺につながれた人間。バートルビーもひきこもりとどう違うのか。

**画家**：あいだの哲学と一括りにしてしまうとそれほど面白くないだろうね。あれもこれもあいだの哲学だということになる。あいだの面白くないところがそういう生きているのか死んでいるのか宙ぶらりんな医療介入を受けている人たちとところに出ていると。

**アルバイト**：あいだ礼賛というのではなくて、あいだは潜勢力を持っている

---

<sup>10</sup> 名郷直樹. 『いづれくる死にそなえない』. 生活の医療. 2021.

<sup>11</sup> ジャック・ラカン. 『不安』. 小出浩之他(共訳). 岩波書店. 2017.

けどあいだ自体に留まるのがよいわけではないし留まることができるわけでもない、留まっているように見えるものはあるけどそれ自体は非常に不安定という。

### 0 $\infty$ システム

学生：ひねもす無為は鈴木國文『同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダンをどう生きるか』の書評の中で、0 $\infty$ （ゼロ無限）システムについて述べている<sup>12</sup>。「これは0 $\infty$ =1という不合理を実現可能なものとして規範化した社会の契機をキリストの二重性のうちにみたもの」で「私たちが正しいものを正しいといえない社会、おかしいものをおかしいと指摘できない社会にいるとしたらしかしそれは私たちはすでにその不合理な時代の黄昏にいてもいえるのかもしれない」という。ひねもす無為の述べる 0 $\infty$ システムについて少し確認、敷衍させていただきます。

#### 0 $\infty$ =1

これが基督教の打ち立てた倫理だと仮定する。1/ $\infty$ =0 これは良いとしよう。1/0= $\infty$ これも良いとしよう。しかしこれらの分母を払った形である0 $\infty$ =1これはどうであろうか。正しいといえるだろうか。これは数学的には不定として扱われ得るものである。要するに1になるかどうかは実際のところわからない、ということだがいや確かに1になるのだということを保証した、それが基督教の倫理だということまで話をすすめる。

0 $\infty$ =1 これはどういうことだろうか。まず1/ $\infty$ =0とはどういうことか。まず1はキリストである。比というのは相対評価を表している。分母からみた分子はどうであるかということを示している。1/ $\infty$ =0これを言い換えるとすなわちこうなる。無限の存在からみればキリストは0である。同じく1/0= $\infty$ については、こういえるだろう。無からみればキリストは無限の存在であると。0は民衆、無限は超越的存在すなわち神と考えることも可能だろう。するとさらにこういえる。キリストは民衆からみれば神と同等の存在であるが、神からみれば無に等しい存在であると。これは常識的に理解できる

<sup>12</sup> ひねもす無為、「鈴木國文著、『同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダンをどう生きるか』」、『京都アカデミア』.2016年2月5日.最終アクセス2022年4月27日. [https://kyoto-academeia.sakura.ne.jp/book\\_review/id74/](https://kyoto-academeia.sakura.ne.jp/book_review/id74/).

定式であると思う。キリストでなくてもこうした存在はいくらでも存在し得る。単に比つまり相対の問題であるからだ。

しかしキリスト教はさらにこの定式を変形させた。 $0^\infty=1$  である、と。つまりこういうことだ。無と無限からキリストが産み落とされた。こうもいえる、無と超越のあいこのがキリストであると。このような存在としてのキリストは確かに存在したし、今後もこれが可能であるということだ。これがキリスト教の打ち立てた倫理である。

しかしこれは一種のトリックである。本来は求めることがかなわないもの、これを可能であるとしたところにキリスト教の意義があった。奇跡を倫理として打ち立てた。

周知のごとく、差異を生み出しながら同時にその差異を食いつぶしていくように繁殖するシステムが資本主義である。これはキリストの倫理があっではじめて可能となった。

最初は無限の相そして次にゼロの相がくるのはみやすい道理である。というのは初めは普通資源は豊富にある。しかし資源は実際のところ無尽蔵ではない。

キリスト教の教義にある最後の審判は  $0^\infty=1$  の信仰から容易に導きだされる帰結である。それは 1 が可能であるからだ。いつかこの計算には終わりが来るとのことだ。

その終わりのときに救世主が再び現れる。

$0^\infty$  信仰では無限の追求とともに 0 の追求も同時に賞賛される。それは無限があり 0 がありはじめて 1 が可能となる、これを信じているからである。

$0^\infty$  信仰は終わりを目指している。1 に向けてドライブしているといえる。

0 への志向性は  $\infty$  への志向性の裏返しである。逆数をとるだけで 0 は  $\infty \rightarrow \infty$  は 0 へと瞬時に反転してしまうのだから。

ゆえに 0 志向も  $\infty$  志向も目指すところは同じ。 $0^\infty$  システムは 1 を目指して絶えず駆動している強迫的運動である。

12 世紀に起こった中世解釈者革命は  $0^\infty=1$  の倫理のもとではじめて可能となった、と考えることもできるかもしれない。

中世解釈者革命以降、根拠律であるテキスト＝法は無限に書き換え続けることができるものとなった。ここにテキストの文書化、合理化、客観化、階層化が始まるとされる。

### 0 志向性と∞志向性（資本主義の二つの顔）

学生：まず∞志向性優位の時代があった、そして次に 0 志向性優位の時代へと移行した、とします。

0 志向性には以下のものが挙げられます。すなわち、

- 1960年代以降の統合失調症の軽症化（欲望の排出路の増殖）
- 拒食症（体重0）
- ノマド（時空0）
- 街場（知識0）
- 禁欲主義（欲望0）
- 自殺
- 無神論（サイエンス）
- 管理型社会
- 光の波動性（質量0）

∞志向性には以下のものが挙げられます。すなわち、

- 1990年代以降の解離性障害の増加（多文化主義）
- 過食症（体重∞）
- 強迫症（時空∞）
- 大学（知識∞）
- 快樂主義（欲望∞）
- 長寿
- 神学
- 規律訓練型社会
- 光の粒子性（質量∞）

便宜上二分法がされていますが、ここで 0 と∞は相互浸透的であることには留意しておく必要があるでしょう。0は∞の裏返しであり、∞は0の裏返しにすぎない。両者は表裏一体である。

### 0の権力志向

学生：0へと駆動する力は権力欲より備給される。

何ものでもありたくないということはすべてでありたいということとどうち

がうのか。

$1/0=\infty$ という形で 0 に身を置くことで無限の視野を獲得することを可能にするたくらみがある。 $1/\infty=0$ という形ですべてであろうとすることで意味の充実を無意味に転化しようという従来のたくらみとそれはどちらがうのか。0 を目指すことも $\infty$ を目指すことも自らにしみついた倫理性には無自覚であるという点で共通している。それは 0 や $\infty$ が可能である、ということ倫理としている。ほんとうに 0 や $\infty$ は可能なのだろうか。

問いはこうだ。ほんとうに 0 や $\infty$ が可能である世界は可能か。可能であるとするので $0\infty$ システムは動いている。0 を目指すことや $\infty$ を目指すことである程度の安定は保証されるだろう。しかし 0 と $\infty$ を同時に目指すことはシステムを極めて不安定なものにする。

どちらか一方を持ち上げるだけならそこまで猛威を振るうことはなかった。

両方持ち上げてしまったからこそ資本主義は癌腫の様相を帯びた。

とすると癌にあるのはアクセルばかりではないということも想像できる。ブレーキもあるはずだ。癌にはアクセル全開でブレーキを踏むような性質があるのではないか。

癌の植民地主義は存在そのものの破壊を目指している。そのプログラムは生命を蝕むことだ。生命が繁殖という手段で自滅を目指している。そうなると人類はもう黄昏だ。ほんとうだろうか。終焉を唱えるのはまだ早い。しかし終焉があるとすればそれはシステムの終焉にすぎない。ひとつのシステムが終わる。終わるのが単にシステムであるのならまた立ち上げればいいだけのこと。終わりや始まりは何度もそこらじゅうで繰り返されている。特別なことではない。

以上がひねもす無為が提唱する $0\infty$ システムの概要です。

### コードとモード

学生：ラカンの翻訳者でもある鈴木國文のポリフォニーとしてのポストモダンの概念と重ね合わせ、ひねもす無為はこのあと精神疾患の分類を時代のモード（その時代の主流となる倫理形式）と個人の採用するコード（行動規定）のあいだのずれからとらえてみることを試みています。個人の傾向は木村敏の antefestum、postfestum、intrafestum の概念も念頭に置き先取り型、ノスタルジー（郷愁）型、カリカチュア（戯画化）型に分けています。モードとコ

ードのずれにより、文化の中で精神疾患の単位としての現出の仕方が決まる。時代の区分は大澤真幸の理想の時代、虚構の時代、不可能性の時代にも倣っている。ここでラカンの象徴界、想像界、現実界の概念を重ね合わせる方もいるでしょう。

| モード \ コード  | 郷愁                                 | 戯画                                 | 先取り  |
|--|------------------------------------|------------------------------------|--|
| <b>1</b><br>農耕文化、富の蓄積  | <b>0</b><br>動物                     | <b>1</b><br>人間                     | $\infty$<br>超越                             |
| $\infty$<br>啓蒙主義<br>人格、規律  | <b>1</b><br>凡人                     | $\infty$<br>万能人                    | $1/\infty \rightarrow 0$<br>統合失調症<br>(妄想型) |
| $1/\infty \rightarrow 0$<br>1960-1975<br>理想のまなざし、覗く人                       | $\infty$<br>単極性うつ病                 | $1/\infty \rightarrow 0$<br>神経症    | $1/0 \rightarrow \infty$<br>統合失調症<br>(破瓜型) |
| $1/0 \rightarrow \infty$<br>1975-1980 年代<br>虚構                             | $1/\infty \rightarrow 0$<br>逃避型うつ病 | $1/0 \rightarrow \infty$<br>境界例    | $0\infty=1$<br>普通精神病                       |
| $0\infty=1$<br>1990-2000 年代<br>覗かれない。自律社会。<br>原子力( $E=mc^2$ )<br>不可能を求める時代 | $1/0 \rightarrow \infty$<br>ひきこもり  | $0\infty=1$<br>PTSD/解離<br>愛着障害     | $0\infty=$ 不定<br>世に棲む                      |
| $0\infty=$ 不定<br>2000-20xx 年代<br>JK、KY                                     | $0\infty=1$<br>双極性障害<br>発達障害       | $0\infty=$ 不定<br>ナルホイヤ<br>Covid-19 | $A/B=C$<br>定数関係<br>斜めの関係 1                 |

(コードとモードのグラフ)

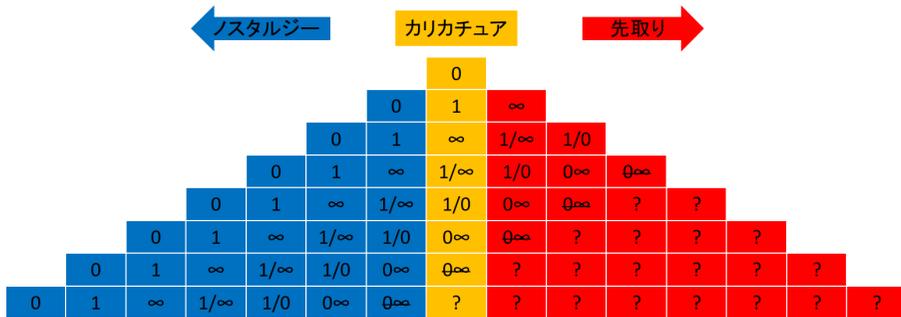
統合失調症(緊張型)はこの中には位置づけられていませんが、 $0\infty=1$  をそのまま生きようとする努力がありその挫折が寛解と呼ばれるかもしれない。このグラフは生のグラフともいえるでしょうし、「生きていない」場合は表から漏れるのでしょうか。普通精神病は、大他者が存在しない時代の、「性関係がない」時代の精神病といえます<sup>13</sup>。現代においては、父の名は排除さ

<sup>13</sup> マリー=エレヌ・ブルース、「ラカンのディスクール理論からみた普通精神病」. 松本卓也(訳). 『ニクス』1, (2015): 188-201.

れており、「統計学的超自我」があるとマリー=エレーヌ・ブルースはいいま  
す。多様性とか複数性とかそういうことが言われるようになる。三島のように  
大他者の復権を説く道を諦めることで、それぞれの多様な症状を生きる道  
が開かれる。そのまなざしはモード化される中で、解離、やがては発達障害  
をやまいとして析出させることになるでしょう。JK、KY は  $0\infty$ =不定よりも  
前の時代に位置づけたほうがじっくりくるかもしれません。「空気読め」か  
ら「空気なんて読めません！」へシフトする。

**画家：**動物と人間のあいだというより、動物(0)と超越( $\infty$ )のあいだとしたほ  
うがじっくりくるか。構造で考えるとどうしても凝り固まってしまうが、コ  
ードとモードのずれの中にやまいとして析出するものを位置づけなおしてい  
るわけだね。

**学生：**鈴木國文によれば「前の時代を否定する」という動きを特性とするモ  
ダンであるが、「それでも新たな時代には、前の時代の何がしかが形を変え  
て残存して」おり、「モダンという時代の精神そのものがきわめて多声的  
(ポリフォニック)な様相を呈する」ことになるといいます。「歴史上の過  
去を、遠い過去としてのみ読むのではなく、現在の中に畳み込まれ、パイ生  
地のように残る実相としてとらえること」が精神の営みについてとらえるた  
めには必要なのだと<sup>14</sup>。これを踏まえてひねもす無為は時代のパイ生地をピ  
ラミッドの図形として提示しています。



(時代のパイ生地)

**アルバイト：**確かに、ある時代が終わったら次の時代はこうだ、とすぱっと  
切れるものではないですね。幾重にも折り重なっている。

<sup>14</sup> 鈴木國文. 『同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダンをどう生きる  
か』. 中山書店. 2014.

**浮浪者**：0 と∞のあいだは豊饒の海だったかもしれないけれど、資源には限りがあるしそろそろ終わりにしましようということですね。というかこのシステムは破綻せざるを得ないと。最初から破綻を目指していると。

**学生**：ひねもす無為はピラミッドの右側をクエスチョンとしていますが、コードとモードからならグラフの右下は0や∞ではなく定数としています。AやB からなる定数の具体的関係=比のなかを生きることになるだろうしそうあるべきだということでしょうか。斜めの関係というのは垂直でも水平でもない、叔父叔母のような人物のことですね。近所のおじさんとかおばさんでもいいと思います。そうした超越的な存在ではないけれど困ったときには頼りになる存在との関係があればよいと、わざわざ神様とか極端なものを引き合いに出さずに具体的な関係の中に閉じてゆく、という生き方ですね。そういう生き方をモード化していければよい。

**画家**：コードとモードの図表は多くの修正を必要とするだろうけど、病気を普遍的な実体として捉えるべきではないということを常に想起させるということには一つ意義があるだろうね。

### 意志と責任

**アルバイト**：カルロ・ロヴェッリのいうように完全にミクロな視点において時間はないとすれば、始源というものもないということになる。始源というものは完全にはミクロではない視点においてはじめて見いだされる。意志は私という始源を前提としていたが、そうしたことはフィクションでしかないし、私というものは多様な選択と他の個体との相互作用の中で一つのずれとして析出してくる。病気は誰のせいかという話がある。親が悪いのか、環境か？ 遺伝？

マクロな視点からは、意志はあるし責任はあるともいえるかもしれないけれど、そもそもそういうぼやっとした視点で決まったことだから慣習的な取り決めでしかないし、だからこそいつでも情状酌量の余地が残される。

**学生**：中井久夫は血液型性格診断について、まず人は馬鹿だから 8 つ程度までしか記憶できないから多くの分類はせいぜいその程度の数であるといい、血液型は一本の染色体の遺伝子数を一定とすれば遺伝子は 23 対あるので 23 分の 1 程度は性格に寄与してもいいだろうということを述べています<sup>15</sup>。血液型

---

<sup>15</sup> 中井久夫、「血液型性格学を問われて性格というものを考える」、『臨床瑣

物質の遺伝子は9番染色体にのっていますから。

血液型性格診断の批判はよく耳にしますが、私が知るかぎりでは中井の言説が最もまっとうに思えます。当たり前のことなのですが、血液型だけで決まるとか遺伝だけで決まるとか環境だけで決まるとか親だけで決まるとかそんなことははじめから問題としていない。そのような多因子の絡み合いがあり得、一つの原因に帰することは当然できない。だから親が悪くないわけではないし遺伝子が悪くないわけではないし環境が悪くないわけではない。すぐに「だから親は悪くない」とかそういう結論を出そうとする向きもあるが、悪くないわけではない。親は悪くないのだと思ったら子供は自分自身に原因をつき返されて戸惑うことがあるだろう。親が悪い、という主張が幅を利かせていた時代には親だけが悪いというわけではないということは慰めになるだろうが、悪くないというわけではないということを忘れるべきではない。責任の所在など最初から一つに同定などできないのが普通だが、同定できない場合に当事者自身に原因をつき返されることがあることには問題がある。だから薬で調整しましょうとか認知行動療法とか心を整えましょう、といった流れになってしまう。医師は自分が悪くないわけではない、ということも忘れるべきではない。意志も責任も取り決めとしては必要かもしれないが、それは虚構だから。

**画家：**情状酌量の余地がないことなどない。

**学生：**中井久夫は行動化が先行して後にイメージ、言語化のコースを辿ることがあるという<sup>16</sup>。「例えば、行動の追想であり、後悔であり、合理化である。審判や裁判はこの過程に社会的に通用する形式を与えるものである。裁判はそのために存在するときえいってよい。行為はすべて因果論的・整合的な成人型のナラティブ（語り）で終わらなければならないという社会的合意が裁判の前提である。でなければ、何か修復されない穴が社会的に残るのである」。語りとしてすぐれた判決文には「事態を落ち着させる力」がある。「言語化の力とは、自己と自己を中心とする世界の因果関係による統一感、世界に対する個の能動感、世界と自己の唯一無二感を取り戻す力である」という。判決文が治療的であることがあり、「そのような判決文は事後的だが、

---

談 続』. みすず書房. 2009.

<sup>16</sup> 中井久夫. 「『踏み越え』について」『徴候・記憶・外傷』. みすず書房. 2004.

踏み越えに言葉を与え、人生の中に位置づけて、人生に意味を与え直す」。

**アルバイト**：誰もが自分の意志とは関係なく踏み越えてしまうことがある。

**学生**：中井久夫は神経生理学者ベンジャミン・リベットの仕事に言及しています。彼は「人間が自発的の行為を実行する時、その意図を意識するのは脳が行動を実行しはじめてから0.5秒後である」といいます。そして自由意志という体験は、自己 self（脳全体の機能）が私 I（意識の機能活動）に処理をまかせているときに起こるといいます。

**画家**：Iが self を搾取している、仕事の成果をそれと知らずに奪っているというわけだね。

**学生**：私が出来事の私的所有権を主張するときに、自由意志なるものが顔を出すわけですね。中井久夫が「踏み越え」についての論文の中で触れていることですが、アンリ・エランベルジュは「個々の戦争犯罪だけでなく戦争をも犯罪学の対象としなければならない」といわれたそうです。

**アルバイト**：出来事のレベルで踏み越えを考えるわけですね。アルコール依存や薬物中毒などについても同じことがいえそうです。

**画家**：私的所有権と自由意志を主張することは責任の所在を明確にすることでもあるね。そんなのはうそっぱちなわけだけど。

### 一挙に変わる

**浮浪者**：革命、revolution のイメージは回転することでしょう。しかし回転するだけでは階級制なりの制度自体を変えたことにはならない。一挙に変わる、という表現が良いと思いました。

**学生**：回転ではなく、なんでしょうね。比喻でいうと、換喩ではなく隠喩なのでしょうけど。ごそっとまるごと変えるわけですし。開いて閉じる、という而今の山水的なものですね。

**アルバイト**：開閉？

**学生**：オープンダイアログですね。オープンダイアログ=革命。

**画家**：言い過ぎかな。まあ、オープンダイアログ的な構造はあらゆる活動において応用がきくね。何かを変えるための活動ではなく、活動自身が目的である活動でかつこれまでの古臭い規範とは異なる行動基準を自己参照している、そのようなオープンダイアログ的活動はそれ自体がつねにすでに目指すところを体現している。

### 雨が降ってもアクティングアウト

**学生：**中井の話に戻りますが、先に述べたような踏み越えは偶然あるいは確率という因子がかなり大きく、そのような偶然の積み重なりから事故的に起きてしまう犯罪を中井は「事故学的犯罪」と呼んでいる。

土居健郎はある学会で雨が降ってもアクティングアウトだよと言ったという<sup>17</sup>。アクティングアウトは現在は非常に悪い使われ方をされていて、「ある際立った、あるいは、ある不連続な、あるいは、ある予想外の、行動が、行為が起こってきて、それが、セラピストの気に入らない種類のもの、であるときに、『アクティングアウト』と名付けるといのが、現在の使われ方」となっていると神田橋條治はいいます。しかし「アクティングアウトとは、言葉に置き換わったならば、言語を介して表現されたならば、重要な発見がもたらされたであろう心理が、言語以外の表出の中に、内的なエネルギーが吸収されてしまったために、せつかく実りある発見をのがした、というような意味」が本来の、フロイト的な意味であるという。この本来の定義に立ち返れば、雨が降っても、汽車の事故などで予定に遅れてもそれがアクティングアウトと呼ばれてもいいだろうと。

**画家：**意志とか時間があるとする狭量な見方からすれば奇異にうつるかもしれないが、ミクロな視点から振り返ると誰がどうした、ではなく出来事の連なりがあるだけである出来事が別の出来事にどう作用したか、そこが問われる。それも出来事は単純に一对一ではなく複雑に絡み合っている。複雑に絡み合っているというのも単純化の結果にすぎないが。複雑に絡み合っているということすら認識できない、中井がプラトンを参照しイデアと呼ぶものがイメージと言語の手前にある。和製英語でアイディアと言ったほうがニュートラルでいいかもしれない。理想像というわけではなく、ただの出来事のルツボ。

**学生：**國分功一郎は『中動態の世界』の中で「出来事に先立って主語=主体は存在しない」と述べています。「出来事とはつまり、個体を発生させるジェネレーター役を担うものなのだ」という。バンヴェニストの定義では「能動では、動詞は主語から出発して、主語の外で完遂する過程を指し示している。これに対立する態である中動では、動詞は主語がその座となるよう

---

<sup>17</sup> 神田橋條治. 『治療のこころ 第二巻 精神療法の世界』. 花クリニック神田橋研究会. 1997.

な過程を表している。つまり、主語は過程の内部にある」。そして「そこでは主語が過程の外にあるか内にあるかが問われるのであって、意志は問題とならない。すなわち、能動態と中動態を対立させる言語では、意志が前景化しない」。

**アルバイト**：出来事が事故やアクティングアウトとなるのはどういうときか。当事者が過程の中にいるのか、外にいるのか。出来事の中に安らいでいるときは、事故とはならないですね。出来事の外に疎外されているとき、つまり私はその出来事に納得していないとき、それは事故でありアクティングアウトなのでしょうね。ただ出来事があって、その出来事の内に安らいでいるのかどうか、誰もが出来事の内安らいでいられるような関係をつくりなおすにはどうすればいいのか、そう考えるとよいでしょうか。病気や個人中心にではなく。

**行動と行為**

**学生**：ラカン**は**行動（アクティング・アウト）と行為（行為への移行）を明確に区別しています<sup>18</sup>。

**浮浪者**：ラカンは不安の表を作成し、両者を別々に位置づけていますね。

|   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 困難さ difficulté <span style="float: right;">→</span> |   |  |  |
| 運動<br>mouvement<br>↓                                | <b>制止 Inhibition</b><br>欲望(防衛、貯蔵の欲望)<br>制止を運命づけられた行為<br>見ないという欲望(desire to not see)             | <b>妨げ Empêchement</b><br>不能 Impotence<br>見ないという欲望を完全には実行できない<br>衝動強迫<br>主体                                   | <b>塞がり Embarras</b><br>過剰なもの<br>キルケゴール<br>不安の傾向<br>斜線を引かれたS<br>妊娠した女性<br>不安の軽い形態                   |
|   | <b>感動 Emotion</b><br>desire to not know   | <b>症状 Symptôme</b><br>転移あり<br>全能 omnipotence<br>まなざし<br>幻想の中で他者の全能を満たす欲望からくる試み                               | <b>行為への移行 Passage à l'acte</b><br>捨てる<br>フロイトのもの<br>遁走<br>舞台(<他者>)から世界(現実的なもの)への移行<br>自殺<br>メランコリー |
|   | <b>動揺 Emoi</b><br>Et moi<br>過少なものの力の原則の外<br>aそのもの糞便<br>肛門的「emoi」<br>権力や力を失わせる<br>I(A) 自我理想、取り込み | <b>「Acting out」</b><br>転移なし<br>野生wildcatの転移<br>顕示<br><他者>へと向かう<br>喪 mourning<br>想像的なもの、愛、i(a)<br>強迫神経症の抑うつ状態 | <b>不安</b>  |

<sup>18</sup> ジャック・ラカン. 『不安』. 小出浩之他(共訳). 岩波書店. 2017.

(不安の表。ジャック・ラカン『不安』より作成)

**学生：**アクティングアウトが舞台の上で演じられるのに対して、行為への移行は舞台から降りてしまう。防衛として制止を運命づけられた原初的欲望の成就が行為であるとすれば、行為への移行ではその欲望を成就させてしまう。「踏み越え」はどちらかといえばアクティングアウトよりは行為への移行に近いでしょうか。自殺・他殺は他者を不在にすることで世界へと移行する、いやおうなく開かれてしまう。

**画家：**一抜けたということね。演じるのを金輪際やめてしまう。

**アルバイト：**ただ演じずには生きられない。

**学生：**判決文というのは世界へと開かれすぎてしまった、そうした行為者を再び舞台へと、それも以前とは違う舞台へと招待するためのものなのかもしれません。

### 統合失調症と発達障害と PTSD

**画家：**かつてドゥルーズが統合失調症と呼んでいたものは実際には自閉症だったのだろう、などと言われているね。他にも統合失調症ではなく自閉症だった、発達障害だったというフレーズはよく耳にする。そうした物言いは疾患単位を実体と捉えすぎているきらいもあるかもしれないが、どういうところが違うのか、一度立ち止まって考えてみることは悪いことではないかな。

**学生：**やまいが個人の採用するコードと時代のモードとのずれから析出する社会的な現象にすぎないとすれば、現在のモードから過去の個人のコードを眺める視点は別の、不要な、つまり診断する必要もないし、できるわけでもない診断名をいたずらに付与してしまう懸念もありますね。同時代的ではない物事を俯瞰的に眺めて正しいことを言った気になる、というアナクロニズム、時代錯誤を犯してしまうということがありますね。

ただ統合失調症と自閉症（最近では自閉症スペクトラム障害とか発達障害というほうがなじみがあるかもしれませんが）は違うように見える。あくまでも現在の事象としてそれを語り直してみることはもう少ししてもいいでしょうか。

**浮浪者：**統合失調症は先の中井の言葉を借りれば、踏み越えてしまった倒錯者、発達障害はつねにすでに踏み越えてしまっている、だから踏み越えをなまの体験として経験していない、という違いか。外傷、PTSDは出来事によって踏み越えさせられてしまった人、踏み越えに遭遇してしまった神経症者と

いう見方もできるでしょうか。

**学生：**中井久夫は実際の統合失調症とドゥルーズが取り上げているカフカなどとは少し違うと言っていますね。統合失調症はむしろル・クレジオの小説の感じに近いだろうと。

**アルバイト：**私はル・クレジオがどんな感じがよく知りませんが、カフカは暗いという人もいるけれど普通に笑えますし小説を読む限りは病的体験を表現しているとはいえないでしょうし、そうしたなんとか鬼気迫る感じとか不安定な感じ、中井のいうような安全保障感のなさの中にいる感じはしないですね。むしろたぶん普通の人が放り込まれたら暗い気分になるかもしれないようないわゆる不条理を主人公はそれほどの衝撃もなく受け止めているようにみえます。

**学生：**ラカンでは疎外、分離を経験しているか否かで統合失調症、倒錯、神経症の3つに精神構造を分類しています。疎外は原初的象徴化、父の否（ノン）、原抑圧などとも言われ、分離は父の名（ノン）のシニフィアンの導入、二次抑圧（第二の象徴化）などとも言われます。疎外も分離も通過していないのが統合失調症、疎外は通過したが分離がなされていないのが倒錯、どちらも通過しているものが神経症の精神構造として特徴づけられます。このように構造で分類すると見やすいですが、構造の変化自体が捉えづらくなることがありますね。

**画家：**実際どうしたらいいの？ということにもなりやすいかもしれない。神経症のもつ幻想を行為を通じて横断する、舞台から一度降りる、というのはいいが、また舞台に、それも別の舞台に戻りいわば転移神経症とか新しい症状を獲得するという過程が精神分析的で経験するものであるとすれば、それ自体はあまり大したことがなくて、結局どう横切るの？どういう症状がいいの？どういう、別の舞台ならいいの？ということについてはあまり語られていないように思う。それはもちろん絶対こうあるべきというものはないが、それが分析家と分析主体の二者関係で閉じられているうちは結局大した症状も獲得されなくて終わるだろうし、エンドレスになりやすいのは具体性を欠いているからではないか？オープンダイアログでは多数で、それも関係者全員を集めて座談会ではないが話し合いを通じて複数の幻想を横切らせる、というなかなかアクロバティックなことをしているわけで、そうした多声性、ポリフォニックなところからそのコミュニティになじみやすい症状とか舞台が形成される。精神分析は密室にこもる、二者関係で閉じられて

いる、というところが欠点として大きすぎるように思える。

**アルバイト**：オープンダイアログはフィンランドの国策として公費でしているというのがすごいところですね。精神分析は実際問題としてお金の問題が絡みますし、宗教性が出やすいのですかね。宗教性というのはつまりその協会を維持することに無頓着ではいけないということで。

**浮浪者**：生活に根ざした支援という視点はほぼないし、そうした視点がないこと、あえて目を向けないことを正当化するような言説で固めようとする努力も必要となる。

**学生**：もちろん社会学にラカンを応用することはできますし、ラカン派の社会学はパワフルだと思いますけど、精神分析の実践となると精彩に欠ける。

**画家**：医者はなんでも屋がいい。ラカン派やらフロイト派やら凝り固まると間違える。

**学生**：先程の統合失調症は踏み越えてしまう、発達障害は踏み越えてしまっている、PTSDは踏み越えられる、という区別はわかりやすいですね。踏み越えてしまっている人にとっては世界と大地という分け方をするなら、世界のただ中にいる、世界というのは完全に開かれた場ですね。そういう開かれすぎた場所では、診断というレッテルはがあると嬉しいのですね。意味にとびついてしまう。だから診断が正しいかどうか、ということはまあどうでもいいのです。本人がそうだそうだそのとおりだ、と興奮していうのは発達障害に関する記述が記述だからであって、当たり前なのですけど、当事者から支持されるものだから診断基準を作ったほうも自信を持ってしまいやすい。

**アルバイト**：踏み越えに対する無邪気さに希望をみることもできるわけですね。無邪気に踏み越え、書き換えるという。

**画家**：ただ自分で踏み越えているわけではないから、書き換えるということとはなかなか起こらない。むしろ資本主義社会体制の申し子のようなところもある。

**学生**：ひねもす無為のいう 0 $\infty$ システムですね。0 と  $\infty$  の振幅を保証する分母と分子のあいだの横棒の解消は自閉症的な開かれすぎた場の素地となっている、という。

**浮浪者**：マージナルな人間は与えられた病名を仮につけるとすれば自閉症、発達障害よりは統合失調症に近いだろうが、それはドゥルーズのいう統合失調症ではないですね。

**画家**：マージナルというのはラカンの的には倒錯者だろうね。そのへんが統合

失調症を語るときに哲学者たちがぶれているところで、話がややこしくなっている。

**アルバイト**：きらきらネームというのも固有名を本当に固有なものにしたいという、なんというか、「わたしという症状がほしくてたまらない」という衝動なんですか。

**浮浪者**：症状がほしい、固有名という。

**学生**：踏み越え自体が悪いわけではないが、それがやまいとして語られる社会の側には問題がないわけではないですね。やまいとすることで変化を拒んでいる。

**アルバイト**：社会という防衛ですね。

**浮浪者**：病者を支援するときはそのへんの含みがある。ほんとうは悪くない、ただいずれにせよ、今、ここで支援がないことには。

#### 行為への移行とバートルビー

**学生**：もしあらゆる能力が存在することの能力であるとともに存在しないことの能力でもあるのであってみれば、行為への移行は自らが有している存在しないでいることの能力を行為のなかに搬入することによってのみ（アリストテレスは<救済することによって>と言っている）生じうるのである<sup>19</sup>。

アガンベンはこう述べます。また、春木奈美子は『現実的なものの歓待』の中で行為への移行のもつ転覆の力について述べています<sup>20</sup>。以下少し引用します。

舞台の上で自らを名乗り、自らの真情を吐露する者は、自らが舞台の一部、劇の一部であることを引き受けてしまっている限りにおいて、舞台=劇について証言することはできない。舞台を降りるということは、一見それまでの時間の帳消しのようにいえるかもしれないが、メシア的時間のごとく、それまでの時間を一挙に引き受ける可能性を宿している。なるほど行為への移行には、証言という要素は表だってみえてこない。しかしアガンベンの証言がそ

---

<sup>19</sup> ジョルジョ・アガンベン、「バートルビー」、『到来する共同体』、上村忠男(訳)、月曜社、2015。

<sup>20</sup> 春木奈美子、『現実的なものの歓待:分析的経験のためのパッサージュ』、創元社、2015。

れまでの時間を一挙に引き受けることで世界の意味そのものを覆す力をもつものであるとすれば、まさしく行為への移行は、こうした転覆の力をもっている。

以上です。春木は「最後の審判の時、すなわちメシア的時間と例外状態は、同じ構造をもっている」と言います。つまり、最後の審判の時=メシア的時間=例外状態=行為への移行はそれまでの時間を一挙に引き受ける、引き受けることで舞台について証言する、証言することで転覆する、このような力を持っている。

**浮浪者**：行為への移行は証人になること、残りの者となることを引き受けることでもあると。

**学生**：春木は歓待というのは①襲来性、②絶対的な従属性、③匿名性が特徴で、<他者>に場を与えるものだと言います。

精神分析の文脈だと歓待するホストが分析家にあたり、分析家は対象 a として自らを差し出す。そして、歓待は言語活動からは抜け落ちている<もの>に主張の場を与えると。

**アルバイト**：伊藤亜紗・角幡唯介の対談に出てきた歓待とつながるわけですか。ぶらっと訪問することをイヌイットは「プラット」と言い、本当にぶらっとアポ無しで訪問してくるようですが、これを伊藤は歓待と言っていましたね。

**画家**：イヌイットの世界は、白夜、極夜と境界があいまいで開かれている<sup>21</sup>。現地の人が口癖のようにいうナルホイヤ（わからない）という言葉はこの開かれに対する名指しといえるかもしれない。

**学生**： $0\infty=1$  という形で私達は絶えず開かれている。それに対してイヌイットは開かれているようにみえて閉ざされもある、ということですね。

**画家**：イヌイットには自殺者も多いというが、わからないは行為への移行への歯止めになるかもしれない。プラットの歓待は世界への通路を開くがそれが反転し大地となる、その契機がナルホイヤといえるだろうか？

**学生**： $0\infty\neq 1$  と否定で結ぶこと。このように結ぶこと、不確実性を享受することが大地の信頼へとつながる。イヌイットは統合失調症と似たところがあるのでしょうか？

---

<sup>21</sup> 角幡唯介、『狩りの思考法』、清水弘文堂書房、2022。

**画家**：農耕社会よりは狩猟採集民と関係がありそうということは言われるね。

**学生**： $0 \neq 1$  をラカンのいうところの疎外（第一の象徴界）に対応させることもできるでしょうか。疎外を経験しているがまだ分離の手前として。

**アルバイト**：分数の関係でないからまだ分離は経験していないけれど、ということですね。そうすると、イヌイトは倒錯者の精神構造と似ていると。

**学生**：名指し（父の名）はないが

否定（父のノン）は少なくともある。ある意味危ういがだからこそ可能性にも開かれている。歓待は不確実性を享受するということですよ。それが翻って大地への信頼にも結び付いている。

**浮浪者**：世界へ開かれることが大地の信頼への通路となる。

**アルバイト**：数学の世界では、親子関係で確立されるタイプの順序を「半序列」と呼んでいるそうですね<sup>22</sup>。カルロ・ロヴェッリが説明しているように、人は親子関係を通して「（全順序ではなく）半順序集合」を形成する。そして、人類の一人ひとりに自分自身の祖先の過去円錐と子孫の未来円錐がある、宇宙の時間構造はこのような親子関係による構造と似ていると。「宇宙の出来事の間には、完全ではない、部分的な順序が定められるのだ。『拡張された現在』は過去でも未来でもない出来事の集まりで、わたしたちの子孫でも祖先でもない人々がいるように、確かに存在する」。

半序列つまり序列と序列の円錐のあいだに拡張された現在が広がっている。大地、存在は本来このように不確かな時間の序列と序列のあいだから産み落とされる。

**学生**：カルロ・ロヴェッリ『時間は存在しない』からいくつか引用してみましょう。

物理学における「時間」はけっきょくのところ、わたしたちがこの世界について無知であることの表れなのである。時とは、無知なり。

観測可能な世界のすべての記述に視点が含まれている

[記述には視点がついてまわる]

根本のレベルにおけるこの世界は、時間のなかに順序づけられていない出来

---

<sup>22</sup> カルロ・ロヴェッリ、『時間は存在しない』. 富永星(訳). NHK 出版. 2019.

事の集まりである。それらの出来事は物理的な変数同士の関係を実現しており、これらの変数は元来同じレベルにある。世界のそれぞれの部分の変数全体のごく一部と相互に作用していて、それらの変数の値が「その部分系との関係におけるこの世界の状態」を定める。

過去の痕跡があるのに未来の痕跡が存在しないのは、ひとえに過去のエントロピーが低かったからだ。ほかに理由はない。なぜなら過去と未来の差を生み出すものは、かつてエントロピーが低かったという事実以外にないからだ。痕跡を残すには、何かが止まる、つまり動くのをやめる必要がある。ところがこれは非可逆的な過程で、エネルギーが熱へと劣化するときに限って起きる。

時間は丸ごと現在にある。わたしたちの精神のなかに、記憶として、予想として存在するのである。

時はわたしたちを存在させ、わたしたちに存在という貴い贈り物を与え、永遠というはかない幻想を作ることを許す。

世界の出来事を統べる基本方程式に、過去と未来の違いは存在しない。過去と未来が違ふと感ぜられる理由はただ一つ、過去の世界が、わたしたちのぼやけた目には「特殊」に映る状態だったからだ。

わたしたちが見ている現実のありようは、わたしたちが組織した譚妄であり、それが進化して、結果としてはかなりよく機能し、わたしたちをここまで連れてきた。

とはいえ理性も単なる道具、一本のペンチでしかない。わたしたちはそのペンチを用いて、火と氷でできた実体—自分たちが生き生きとした燃えるような感情として経験するもの—を扱う。それはまた、わたしたち自身をつくっているものでもある。わたしたちを推し進め、引き戻すもの。わたしたちが美しい言葉で覆い隠すもの。それがわたしたちを行動に駆り立てる。しかもそこには、わたしたちの言説の秩序をすり抜ける何かがある。なぜなら結局のところわたしたちには、どんなに整頓してみても、決まってその枠組みの外に残るものがあるということがわかっているのだから。

**画家：**過去も現在も未来もないところから、大地が生まれる。大地は私たちの譚妄の大地でもあるわけだ。盤石にみえるが微視的になればなるほどほころびがでる。大地と世界の差はどこまで私たちが巨視的にいるか、微視的にいるかそうした視点の強度の差といってもいいだろうか。

**学生：**中井久夫は関与しながらの観察、関与的観察といったけれど、観察とはそれしかない。つねにすでに私が入り込んでいる。そのことについて知らないような顔をするかどうかでしかない。

**アルバイト：**オープンダイアログはそのような現在も過去も未来もない、一つの時間の円錐には閉ざされていない場に丸ごと入り込み、多声的な横断を通じて別の舞台をしつらえる、ともいえるでしょうか。これこそ現実的なものの歓待でしょうね。患者とかクライアントはその中心にはおらず、中心に据えられるのは出来事、一つの対象a、そこから別の他でもあり得た可能性を抽出し、互いに変容を遂げる。

**学生：**未来語りのダイアログはその他でもあり得た可能性、another worldから遡って現在を生き直すということでしょうか。面接などではアイデンティティの同一性、つまり過去と現在と未来の私が一致している人間が真人間であり、そうした人材が求められる傾向があるでしょうけれど、未来から語るほうがずっと面白いかもしれません。ただこれは一つの方法論で例えば皆で何かを具体的に進める際の推進力にはなるけれど、個人的な危機に直面している急性期にはそぐわない。

**画家：**だからオープンダイアログが急性期の対応としてあるのかな。未来語りは1、2、3でみんなで少し馬鹿になることで舞台へと戻っていく。少し馬鹿にはなるが、今よりもましな舞台を演じられるように。

**学生：**治療の際に、治療によって、薬によって、少し馬鹿になったように思えるかもしれないが、というようなことを患者に伝えると中井久夫が言っていましたね。

**浮浪者：**対象a、この社会から零れ落ちた残滓は歓待やバートルビー的存在から感得され行為への移行へと促される。行為への移行はそのような社会、舞台からいったん降りる、それが片道切符となるかどうかはわからないが。

**学生：**結果は問わない。別の世界を、いや世界を完全に微視的な視点を、というより視点がない状態におけるこの現実とするなら、「別の」は余計で、ただ世界と言うのほうが正確ですね。この世界を、別の形で提示し続けること、これが哲学であり藝術ではないでしょうか。

高桑は「哲学とは、概念を云々することで世界の認識を更新する知的な抵抗である」と述べていますね<sup>23</sup>。

**アルバイト**：絶えず社会を更新し続けるために。

**学生**：メシア的時間は  $0^\infty=1$  に否をつきつける行為だと思うのです。  $0^\infty$  システムは現実界が可能であると世界は可能であるとした一つの倫理規定、カルロ・ロヴェッリの言葉を借りればひとつの譎妄なわけですが、それに否を唱える。最後の審判はいつか来ると、それが  $0$  と  $\infty$  の一致により、 $1$  が産み落とされるときだところ資本主義的体制がうそぶくとき、それは約束することで永遠に先送りされている、ともいえる。そうではなく、いまがその時であると。これがパウロ=キングのメシア的時間ではないでしょうか。その行為によりキングは盗まれた時間を取り戻すのです。いまがその時というのは、時間の円錐から一度離れ別の円錐への移行を一挙にはかるといっていいかもしれません。

#### ロボは未来を想起するか

**アルバイト**：島田虎之介の『ロボ・サピエンス前史』では、21世紀初頭に原子力発電所が爆発し、核燃料が発する放射線は生物を即死させるレベルとなり、人間による回収は不可能と判断され政府により大量のロボットが動員されたといいます<sup>24</sup>。超長期耐用型ロボットのマリアは恩田カロ子と命名され放射能が無害化するまで25万年はかかるという核廃棄物を貯蔵するオンカロという施設を管理することになります。そして25万年という歳月を長大なトンネルの奥深くでひとり過ごすことになります。25万年の間にロボットは人間の形態を模倣する必要がなくなる、頭が動物、身体は人間といった形態をとるようになる。

**浮浪者**：人間と動物のあいだ…

**アルバイト**：科学技術の進歩でロボットはほぼ100%確実な未来予測が可能となりました。そして人類に未来はないとロボットにより結論づけられ、ロボットたちは人間たちには何も告げずに地球を離脱します。人間たちが今後数百年代にわたって文明的な生活を送っていけるハードウェアを残して。

3万年後に原始人のような生物が施設の前に現れます。それが人類の成れの

---

<sup>23</sup> 高桑和巳. 『哲学で抵抗する』. 集英社. 2022.

<sup>24</sup> 島田虎之介. 『ロボ・サピエンス前史』. 講談社. 2019.

果てなのか、また別の新しい人類なのか、ロボットが残した「人間たちが今後数百年代にわたって文明的な生活を送っていけるハードウェア」によるプログラムなのかわかりません。ただマリアがミッションを完遂し自らのデータを宇宙へ移送するときに現れた人間の子供の姿はマリアがミッションを開始する前にインストールされた？人類の5万年の記憶の旅の中で出会った原始時代の子供の姿と全く同じものでした。

**画家：**これは歴史が繰り返されているとシンプルに考えることもできるかもしれないが、本当はそれ自体シンプルではないかもしれないが、ともかく、未来のほうが歴史を規定しているようにも思ってしまうところがある。

**アルバイト：**実際マリアは墮落した人類を眺めている自分を開発した博士を、懐かしそうにその子供と重ね合わせて見ている描写があります。マリアは人類の過去と現在を重ね合わせている、と同時に、未来と現在を重ね合わせているようにもみえる。つまり、未来を想起するということが起こっているようにみえるのです。

**学生：**未来を思い出す。

**アルバイト：**未来を思い出す、懐かしむことはできるのでしょうか。ということを考えさせられるわけです。

**画家：**実際にマリアはそれをしている。ロボットはいくつもの現実世界の可能性を想定することができる。

**アルバイト：**いくつかの時間の円錐を同時に、あるいは並行して演算することができる。だから懐かしいという感覚は時間の円錐レベルで考えると、未来か過去を問わない、懐かしいときは丸ごと懐かしい。その丸ごとを想定できないただなかにいる者だけに過去や未来があるのだから、厳密にはロボットは懐かしむことはできないかもしれないが、いまここに生きることをプログラムされそのように生きる者として眺めるのであれば、懐かしさは生じないが、それはロボットとしての虚構なので懐かしさはバグとして入り込んでしまうこともあるかもしれない。

**学生：**いまここを生きる懐かしさを持てる視点に不意にバグとしての無時間、無が入り込む。

**アルバイト：**マリアは25万年の間にほとんど眠って過ごすわけですが、それがユクスキュルのダニと似ているというのもそうですが、その間に人間からもロボットからもある種見放されることで距離を取らざるを得ない立場に立たされる。抑止解除から宙づりにされたダニが動物/人間と神のあいだに位置

づけられるとすればマリアはロボットと人間のあいだに位置づけられるでしょうか。無機物と有機物のあいだ、非生命と生命のあいだ。

**画家：**世間を騒がせているウイルスも生物であって生物でないようなマージナルな存在だね。

**学生：**そういう境界的な存在こそが新しい円錐を主軸にシフトさせる力を持っているのかもしれないね。

**アルバイト：**マリアは自らのデータを宇宙に飛ばすときに、データを移送するための円の中にその原始時代の子供と一緒に立つわけです。人間の時代が終わり、ロボットの時代が始まるとしても、ロボットの時代はそれほど明るいものではない。ロボットも人間と同様にマリアのミッションを人道上の問題があると判断しながらもプログラムを強制終了するために破壊するよりもそのまま任務を遂行させることを選び、今後もサポートし続けるとしながらも 100 年後にはぱったりとマリアの前からロボットも現れなくなるのです。それは人間とは別の選択であったとしても最善というわけではない。マリアは境界人としてロボットのデータに人間のものを紛れ込ませる。もちろん革命だとか転覆だとかそういうことを目論んでいるわけではないですが、目論むということ自体が時代的であることをマリアは知っている、と思います。

**画家：**25 万年生きるというのは途方もないことだね。人間も娑婆に生きるロボットも幼子同様だろうね。人間だからとかロボットだからとかいう括りでは雑すぎるということがわかる。

### あいだの陥穽

**学生：**境界人、中間地帯、例外状態等々、このあいだの領域をどう名指すかは文化圏にも左右されるでしょうが、このような領域には世直しに結び付き得る可能性があるということはあるでしょうが、この例外状態を常態化させること、 $0\infty=1$  とコードとして規定してしまふこと、これにはまた問題もある、ということも忘れないようにしたいところです。だからマージナルに生きるというより定数として生きていく、その定数をどう分数の比として析出させるか、これはいかようにも変え得るわけですけど、そうした具体的な問題を具体的に捉えていくということが人間以後とかロボット以後の世界では重要となるというかそれしかないのだと思います。もちろん社会の中のマージナルなものを掬い上げていく作業はいかに社会が変わろうとも今後も永遠に終わることはない。

**画家：**0 志向とか「動物化」は資本主義社会体制にとっては織り込み済みの出来事ですよ。0 と∞のあいだ、動物と神のあいだで絶えず振幅することを急ぎ立てられている。ではそのような社会における対象 a とはどのようなものか。それはあいだの領域といえるかもしれない。あいだを称揚する社会ではあいだの本来の意義が骨抜きにされている。

**浮浪者：**自由の名のもとで言葉の持つ力が骨抜きにされている。資本主義は多様性を唱えることで屑を量産する。すべてを屑にする。表現の自由ということで、誰も真剣にその言葉に耳を傾けないように仕向ける。多様な価値観があつてよいと。

**学生：**多様な価値観があつてよい、ということコード化するとすべてが屑になるわけですね。だからこの社会における残滓、零れ落ちたものは本来のあいだ、本来の多様性、本来の自由であると。この社会の倫理はすべてであろうとする、同時にすべてであろうとする。それはいわば革命を常態化させるようなコードであり、それが資本主義を終わらせることを困難にしている。すでに革命は起こっているのだから、とうそぶかれることで。

**アルバイト：**誰かの決めた自由はいらない（作詞：Soluna、唄：嵐『ワイルドアットハート』）ということですね。

**学生：**スピノザの「自由の本性の必然性に基ついて行為する者は自由である」という定義に立ち返るということですね。なんでもせよとか生きよとか自由や生を強制されることに抵抗する、定数の関係に入るということです。定数の関係は資本主義体制における 0 志向や「動物化」の事態からは遅れているとみなされることもあるかもしれませんが、生きるということは本来定数関係を生きるということではない。それを見ないようにしている、そのような社会のほうがほんとうは周回遅れなわけです。

**アルバイト：**斜めの関係ということですね。近所のおじさんやおばさんでいいけど、その程度の「権威」は必要であると。むしろ今は平等主義、自由主義から産み落とされる不平等、不自由の中にいるわけでそれは主義であつて平等や自由ではない、ということですよ。

**学生：**「たいていの精神科医は、それぞれの人格に、過度の演技性を感じる。つまり、あまりにもステレオタイプなのである。（中略）このことは、患者の各人格が、社会的に構築された仮面であることを如実に示している」<sup>25</sup>。

---

<sup>25</sup> 大澤真幸. 『不可能性の時代』. 岩波書店. 2008.

大澤真幸はこのように述べています。

「この状態を、こんなふうに表示してみたらどうだろうか。すなわち、多重人格においては、一つの身体を舞台にして、複数の生活様式—複数の文化—が共存しているのだ、と。

つまり、多重人格とは、多文化主義的な共存が、一つの身体の上で展開している状態なのである」（大澤真幸『不可能性の時代』）

**画家：**多文化主義、多重人格はこの時代の戯画となっている、といえるだろうか。

**学生：**0 $\infty$ =1 がまだ今の時代のコードであるとすればそうでしょうけど、前掲のひねもす無為のコードとモードの表を参照すると、定数関係の前段階としての不定関係を契機として今は多重人格や解離は少し後退し、同様のコードが発達障害として析出する時代（モード）に差し掛かっているのかもしれない、とも考えられそうです。あからさまな多重人格や過食と拒食を繰り返す摂食障害は少し目立たなくなっていますか？

**アルバイト：**少なくとも以前ヒステリー患者を精神病院で供覧したように、テレビで多重人格患者を供覧するような所作は減っているようにみえます。そんなにテレビをみるわけではないですが。

### 病者の支援

**学生：**これまでにやまいは時代の中で個人の従う規範（コード）と時代のモードのずれから、そのずれとして析出するだろう、というお話をしました。しかし実際病者として、つまり時代の抱えるやまいを支援するとき、それはどのような形が適切であるのか、ということも考えなくてはならないと思います。

**画家：**悪者探しをして、社会が悪いとしたところで、具体的な当事者の支援とはまた別問題であると。社会が悪いのだから、社会を治すことが治療である、としてもその社会が治るまでの間に当事者をそのままにしておく、という態度はどうなのかと。

**学生：**目的のために現在を犠牲にする、という生き方でもありますねそれは。そうした生き方自体に抵抗したかったはずであるのに。そうではなくて、それ自体が目的であるような活動をする、ということは世直しという大義に夢中になるということではなく、いまここにいる病者を具体的な形で支援していく、ということではないでしょうか。その支援の形の中に抵抗があり、ア

ートがある。

**アルバイト**：病者を病者とせずに野放しにする、ということはなんの解決ももたらさないような気もしますね。

**画家**：かつてのニューディール政策がそうであったように、地域の中で生きる場を提供することもなく、病院を減らし支援を減らすだけでは路頭に迷わせるだけだろう。病者が実体ある病気に罹患しているかどうか、ということは支援の際にはまあどうでもよい。困っているのであればサポートが必要、というだけの話。むしろ困っているのだから病者として、その時代の対象 a として析出してしまっているわけだから。

**学生**：樫村春香は「ドゥルーズのどこが間違っているか？—強度＝差異，および二重のセリーの理論の問題点」という論文の中でドゥルーズとニーチェの違いについて述べています。「ニーチェの偽装する力、差異と強度の現場には、あらゆる不幸と興奮が渦巻いているのに、Dz[ドゥルーズ]の即自的差異には、抽象化された整合的理論にふさわしい、穏便な幸福の気配こそが支配的」であると<sup>26</sup>。

「ニーチェが（そしてハイデgger、クロソフスキーが）自らの幻想と幻覚に魅惑されているのに対し、Dz はニーチェの（または諸作家の）幻想に魅惑されているからだと思われる。いいかえると、ニーチェには真理＝謔妄＝病の発生現場があるのに対し、Dz には病の収集活動がある」。

支援の際には「Dz（ガタリ - Dz）のように諸差異の肯定 - 欲望を称揚するのではなく、『再び欲望する』ことがいかに『困難』か」ということも考えなければならぬでしょう。

**画家**：R・D・レインもしかり、だろうね。反精神医学は大義のために病者を犠牲に捧げているかのようにみえるところがある。社会が悪い、ほら見よ、こんなに苦しんでいる、それを見ずにおくのか！と叫びながら見ずにおくための方法のようにも期せずしてかなってしまっているところがあった。

**学生**：統合失調症患者はそのやまいの過程で、幻覚妄想を獲得したり、強迫的な傾向を示したりすることがあります。先に統合失調症には「踏み越え」があるが、自閉症・発達障害にはそれがあまりないのではないかという話がありましたが、統合失調症の過程の中にはその踏み越えを修復するための涙

---

<sup>26</sup> 樫村春香. 「ドゥルーズのどこが間違っているか？—強度＝差異，および二重のセリーの理論の問題点」. 『現代思想』(青土社)24, (1996): 174-93.

ぐましい努力がある。榎村のいう「(疑似) 精神病者のヒステリー戦略」もこのようなものを指していると思われます。そのときにちょっと馬鹿になるかもしれないが、世間に戻してあげる、という支援をするのが周囲の人間の役割となる。我々のように馬鹿みたいに生きている人間にいったん戻してあげて、それから世に棲めるようにしてあげる。それは端的にやまいが実体であるかどうか、ということではなくその人が困っているから。本人が困っていなくても周囲が困ることがあるなら、その地域から追い出されないように環境を設える、むしろ地域を再教育する、「地域を耕す」ということを同時にする、それが支援であり、それ自体が目的である活動＝支援であろうと思います。

### 統合失調症と文学的統合失調症

学生：榎村は「分裂病(強度)と神経症(抑圧)」は「単純に分離されるべきではない」といいます。中井久夫は急性統合失調症状態においては、カイロスの(人間的)時間は崩壊するといえます<sup>27</sup>。「過去と未来を現在の相において統合する「歴史的意識」(「現在は過去を荷い未来をはらむ」—ライブニッツ)は解体する」と。すべての系列的に進展する過程は成立不能となり、麻痺的停止か強迫的反復の過程が残る。破瓜型的時間では「瞬間、瞬間、瞬間……」への解体傾向が優位であり、緊張型時間ではクロノスの時間の解体により「時間遡行体験」が起こることで「死—再生」というカイロスの時間の急激な出現をみるという(だからこそ緊張型の寛解可能性は一般的に高い)。妄想型時間は「永劫回帰に似た強迫的反復の構造」を持つ。

言いたいことは、一般にラカン派も含め思想や哲学で語られる統合失調症についての特徴は粗雑なものとなりがちで、実際の統合失調症の発病・寛解過程はもっと複雑で十人十色なわけです。そしてそのうちには神経症的な戦略も含まれており過程を見ずにある一点を捉えて(それは構造だけを見るということでもあるでしょう)、これは統合失調症圏だ神経症圏だとは当然言えない。それを構造だけを見ずに直観するアートはあるでしょうが。

「政治的な闘争とは、原理的に弁証法的で下層階級・神経症者のものであり、

<sup>27</sup> 中井久夫. 「統合失調症状態からの寛解過程」. 『統合失調症 2』. みすず書房. 2010.

それ自体何を（例えば神経症の否定と差異の称揚を）語ろうが、結局差異の産出（理論の生産、体験の分化）にではなく、幻想（スローガン）の強化に与するもの」であると樫村がいうように、よく語られる統合失調症はいわば「文学的統合失調症」とでも呼ぶべきもので本来の統合失調症とは区別して考えたほうがいい。

「虫へんの字を増殖させる分裂病者は自分自身が虫になるが、カフカが虫になることはない。そして自らは虫にならないことを担保に、作品世界は、逆に幻想 - 他者 - 快感原則から解放されて強度に従い、とはいえこの強度は、解放された言語の自律性 - 分節性それ自体の出現である」。

文学的統合失調症というのは、作品は自閉症・発達障害の特徴を持ち、つまりすでに踏み越えられたものが描かれ、作家がそれが体験そのものではないことを担保している、といったものだろうと思います。作家と作品全体が体験そのものに蹂躪されているわけではない。作家が作品を通して踏み越えを経て分節（II）へと至るのでしょうか。

**画家：**作家は踏み越えるが作品は踏み越えず踏み越えられている、ということか。

**浮浪者：**作品は語らないが、作家は語る。作家も語らなければ、作家でない誰かがそれを語らない限り作品はただ強度の中に留まり日の目を見ることもない。

**学生：**「強度はその無際限さゆえに、差異と等置しえ、現実界と象徴界にまたがるものともいえるが、反復は神経症的抑圧に起因した、固定した幻想的内容に拘束され、それは現実界と幻想（想像界）の間にある」。

「『盗まれた手紙』において、ラカンは神経症的な反復（想像的なもの）に倒錯的な象徴性を与える、という利益を得、二重のセリーの理論において、Dz は強度 - 反復という現実的 - 分裂病的なもの（意識と意味の外側のもの）に、幻想（想像的なもの）という主体との結合 - 迂回路を与え、散乱する差異でしかないものを意味と意味生産の領野に結節する（つまりニーチェをハイデッガーに連結する）利益を得る」。

（樫村春香「ドゥルーズのどこが間違っているか？ - 強度 = 差異、および二重のセリーの理論の問題点」）

ドゥルーズは「半覚醒的」に言説を受信した。それは差異というより「微分」

的態度であると檉村はいう。それはスローガンに墮す懸念をいつも孕んでいるが、ドゥルーズのようにちょっとぼけた読みをすることで開かれ掬われるものもあるでしょうか。

**アルバイト**：いい加減な読みというわけではないですけど、良い加減に読む、という。

**画家**：完全に分析的というのではない微分的な読み、ちょっとずらしてるのかずれてるのか、ぼけてるのかとぼけてるのかわかんような読み、だけど刺激的、スリリングな読みというはあるし、そもそもどうしてもずれてしまうのだから完全に分析しようというのも結局かなわないのだけど、強迫的とならない程度のほどよい読み方というのは、もっとあっていいと思うよね。一字一句読み落とさないように椅子に座って何度も丁寧に読む、という以外に寝そべったり歩いたりしながら、途中で本を放り投げて散策したり、一年くらい読まずにいた本をまた最初から読み出してすぐまた放り出したりして付き合っていく、という読み方つまり生き方ですね。そういうものを取り戻していきたい。

## 哲学と藝術

**学生**：

人間と動物、世界と環境のあいだの関係は、世界と大地の内部抗争を呼び覚ますように思える。ハイデガーによれば、この抗争は、芸術作品において賭けられている。

もし世界が、作品において開かれを表わすとすれば、大地は「本質的にそれ自体のうちに閉ざされているもの」を名指している。「大地が立ち現われてくるのは、あらゆる開示を前に後ずさりすることで、たえず閉ざされたままに保たれるような、本質的に<露顕されえないもの>として、見守られ保護される場合にかぎられる」。芸術作品において、この<露顕されえないもの>そのものが白日のもとに曝される。「作品は、世界の開かれのもとに大地そのものをもたらし保持する」。「大地を産出するということは、<自己の内に自己を閉ざすもの>としての大地を、開かれのうちにもたらしことなのである」。

世界と大地、開示と閉塞一本質的な葛藤において対立しているとはいえ一は、

けっして分割しえないものである。「大地とは、たえず閉ざされることで救われるものが無へと顕現することなのである。世界と大地は、本質的にたがいに異なるが、けっして切り離されてはいない。世界は大地に基礎を置き、大地は世界をつうじて生起するのだ」<sup>28</sup>。

以上、アガンベン『開かれ一人間と動物』より引用です。

先に述べたように高桑は「哲学とは、概念を云々することで世界の認識を更新する知的な抵抗である」と述べました。哲学は概念を創造することで抵抗する、概念というハンマーで既存の舞台を破壊する。それでは藝術は？という問いです。

**画家：**ハイデガーの言葉はダニの 18 年とロボットの 35 万年の眠りを経るとわかりやすいだろうか。あるいは、ウイルスやバートルビーを。ダニやロボやウイルスやバートルビーは生きているのでも死んでいるのでもない、そのようなものを白日のもとに曝す。

**浮浪者：**それは危うくもある。

**アルバイト：**どちらに傾くともわからない危うさがあるのでしょうか。

**学生：**もう一步進めるなら、藝術は新しい生を生き直す、としてはだめでしょうか。理論と実践という使い古された言い回しをすれば、哲学は理論で藝術は実践。バートルビーの先を生きること。

**アルバイト：**仕事をせず生きるようにするためにはどうしたらいいか、を実践するという、そういう技法を提示しつつ生きるということでしょうか。バートルビーは結局死んでしまいましたが、そうではなく別様の生を生き直すこと、それが藝術、アートであると。

**浮浪者：**藝術はこの大地のもとで世界を垣間見せる、だけではない。

**画家：**垣間見せ、別様の生も提示する。可能性だけではなく、具体的な形で。

## ケアとアート

**学生：**昨年『臨床文藝』のなかでケア=愛でるという定義が提案されています<sup>29</sup>。花が咲くように愛でると。しかし花は咲いても咲かなくてもよいと。

---

<sup>28</sup> ジョルジョ・アガンベン、『開かれ一人間と動物』. 岡田温司・多賀健太郎 (共訳). 平凡社. 2011.

<sup>29</sup> 臨床文藝医学会. 「Line 座談会～ケアについて～」. 『臨床文藝』1, 2021: 26-38.

私たちはつぼみに花の萌芽を垣間見る、そっと花開くのを妨げないように光や水や温度や湿度などに気を配る。また、スコトゥスのいう個体の本来的な不確定性と結びつけながら、その不確定性、特殊性の枠をはみ出してしまいが故に普遍性へと開かれる、個体のこのもの性、差異の犇めき合い（ドゥルーズ）を愛でるのだと言います。イエスや精霊はこの不確定性を体現している。だからこの不確定性が個体（特殊性）への愛が神（普遍性）への愛へと開かれることを保証している。それ自体はよいが、この倫理、 $0\infty=1$  という個体（人間）と普遍（神）からイエス（神でもあり人でもあるもの）を産み落とすことの規範化は資本主義社会体制の基盤ともなっているだろう、ということも指摘されます。だからここでの文脈でいうとケア=愛でる、これは藝術、アートとも通じていると思いますが、愛でることの中にはすべての可能性ではなくある可能性の萌芽をみて愛でる、というニュアンスも含まれると思います。

**画家：**他の生が今の生よりもよいかどうかなどわからないが、少なくとも悪くないだろう、という可能性の萌芽を育てるということになるだろうか。子育てのときもそうだろうね。ただただ可能性だけを見つめればよいわけではない。少し導いてあげる必要はある。

**学生：**それを神学的に神（ $\infty$ ）とか無（0）を持ち出すのではなく、斜めの関係として緩い強制力で導いていく。ケア、生活支援というのはそういうことで、藝術、アートもそういうことではないでしょうか。

**アルバイト：**生活支援はアートといえと。

**学生：**「大地を産出するということは、＜自己の内に自己を閉ざすもの＞としての大地を、開かれのうちにもたらすことなのである」とハイデガーは言っていたわけですが、大地を産出するだけではなく、既述のコードとモードの表でみたように具体的な定数関係、分数関係としての大地を産出するように導く、ということまで含めてアートであろうと。定数関係を実践していくアート。

**アルバイト：**ケア=アートは愛というより恋に近いのかと思います。愛は語り、恋は想う。愛文は相手に届けられるが恋文は日記のようにただ綴られることもありますね。相手へ届くかどうかはわからない、関係が結ばれるかどうかはわからない、結ばれなくてもいい、ただそれでも相手のことを想っている。

**浮浪者：**すべてにすべてと関係しない。

**画家：**中村哲はアフガニスタン難民支援に関わり続けた。すべてを支援することはできないが、ひとつの支援を続けることでそのアート=技法を広げることができる。

**学生：**中村哲がラジオ番組で20年間の活動を支えてきた背骨は何かと聞かれたとき、セロ弾きのゴーシュを引き合いに出していました<sup>30</sup>。

以下引用します。

別にわたしに立派な思想があったわけじゃないんですね。「セロ弾きのゴーシュ」というのがありますね、宮沢賢治の童話で。

お前はセロが下手だから練習しろと言われたゴーシュという人が、一生懸命練習していると、狸が来たり、野ねずみが来たりして、「子どもを治してくれ」だの、いろいろ雑用をつくるわけですね。

しかし、「まあ、この大事なときに」と思うけれど、「ちょっとしてやらんと悪いかな」ということで。そして上手になっていくわけですね。そして楽長にほめられたという話がありますが、それに近いでしょうね。

**アルバイト：**セロ弾きのゴーシュはひとつの生のアートですね。すべてに関わったわけではないですが、ひとつの地域に関わり続けたことで、まさにそのことで、こうした生き方を広めていった中村哲は偉大だと思います。

**学生：**高桑は「哲学入門の先には、いわゆる哲学書を読むことが待っているのでは必ずしもない」といいます。「私たちの先には、言ってみれば、あらゆるものが哲学に見えてくるという奇妙な経験が待っている」。「何を見ても哲学が見える、哲学に見える」と。

藝術、アート入門についても同様のことが言えると思います。アート入門の先に待っているのはアートの専門書を読むことでも一流と言われる藝術作品をみることでも藝術作品を作ることでも必ずしもない。あらゆるものがアートに見えてくる、あらゆる行為がアートになっている、何を見てもアートが見える、アートに見える、アートをいつの間にかしているという経験が待っている。

**アルバイト：**たとえば患者あるいは単に他人との対話は哲学書の読解以上で

---

<sup>30</sup> 中村哲、『わたしは「セロ弾きのゴーシュ」 中村哲が本当に伝えたかったこと』.NHK出版.2021.

あることもあり、それ自体がアートでもあるでしょうね。

### 現実の残滓、偶有性

学生：

セーラ「私が今のセーラであなたが今のベッキーだなんて生まれたときのただの偶然だと思うの」。

ベッキー「偶然？」

セーラ「そうよ。だってもしかしたら私があなただけであなただけに生まれてたかもしれないでしょ」<sup>31</sup>。

(第8話「親切なお嬢様」『小公女セーラ』より)

私はことあるごとにセーラの引用をしているので、知っている人にとってはまたかと思われるかもしれませんが、セーラの想像力というのは他でもあり得たかもしれないものに対する想像力、偶有性への想像力なのですね。だからセーラは立場が変わってもベッキーに対して態度を変えないし、ベッキーもセーラに対して態度を変えない、お嬢様であり続けるのですね。お嬢様といってもセーラは最初からお嬢様ではなかったかもしれない可能性を包み持ちながらお嬢様として生きていたということですよ。

画家：これがさだめと言われれば、ほっとする人もいるかもしれない。そういうものだと。運命か偶然かということだけど、運命というストーリーを引き受けることと偶然という真実を引き受けることは決して別のことではないだろう。運命と言いながらその裏の偶有性にもいつも思いを馳せている。生存者や被災していない者はその裂け目に衝撃を受ける。私がそうだったかもしれないと。申し訳ないと思う人もいる。被災したほうは、私のせいだと思う人もいるだろう。最善説は運命論の一つだと思うが、大きな括りでの運命論よりも被災者にとっては有害な面が大きいように思う。

アルバイト：嘘も方便ですね。素敵な嘘もあれば、しょうもない嘘もある。その背後にはわからなさ、不確実性がある。不確実性に耐えられない人もいる。だから偶然では納得できないときは、運命という説明に頼ることは悪いことではないし、わからないからこそ完全な嘘とは言えない、お互いにお互いのために想像し創造するものですよ。

---

<sup>31</sup> 第8話「親切なお嬢様」．『小公女セーラ』．日本アニメーション制作．1985．

**学生：**偶然は運命の別名という口説き文句があります。偶然を運命に引き寄せるのはその出来事に立ち合った人たちの身振りですね。イロニーとユーモアという対比があります。イロニーは運命などないと冷ややかに言いますが、ユーモアはそれも運命と笑い飛ばすのです。イロニーは運命などない生を生きることとはできないことに無自覚で、ユーモアは偶然はないかのように思い込みうそぶくのですが、私たちは偶然と知りつつ運命の糸を紡ぐ、という生の営みをつねにすでにやめられないしそう生きるしかない。だからこそどう運命を、ユーモアをストーリーとして捻出していくか、という具体的な課題がいつでも残されているわけです。その課題は永遠に片付けることはできない課題です。

**画家：**ユーモアは別様の生き方を提示する一つの方法だろうね。別の仕方で再構築する。

**アルバイト：**終末期の患者にはイロニーよりユーモアがいいですね。やまいの最中にいやというほど否定を重ねてきた人もいるでしょうし、最後に欲しいのは空虚に開かれた真実の言葉よりも多少は耳障りのよいはなむけの言葉ではないでしょうか？

## 2つのあいだ

**学生：**ひねもす無為の引用個所にも出た中世解釈者革命の話に少し触れます。六世紀、東ローマ帝国ユスティニアヌス大帝の命令の元、法学者トリボニウスによって編纂された『ローマ法大全』は、十一世紀に「再発見」されるまで全く「理解不能」なものとしていた、といます<sup>32</sup>。十二世紀末、ユスティニアヌス法典（ローマ法大全）を読み、解釈することを通じて「教会法」が整備されました。「教会法とローマ法が相互浸透し、双頭のひとつの法の体系が出現することになった」と佐々木中はいいます。『グラーツィアヌス教令集』編纂の過程で「文書化」の「情報化」の作業が延々と繰り返され、「ひとつの文章は、無限に書き直せる」とこのように考えが生まれた。これが「準拠の抽象化」です。「法テキストの文書化、合理化、客観化、階層化」が行われ、近代官僚制の世界（文書、書類、資料、データ、情報の世界）が到来したというわけです。テキストの観念自体の不毛化、テキストの

<sup>32</sup> 佐々木中、『夜戦と永遠 フーコー・ラカン・ルジャンドル』、以文社、2008。

エンブレマティックな地位の忘却がここにあります。

中世解釈者革命（情報技術革命）による政教分離、世俗化を通じて法学（根拠）は法（法権利）、神学（解釈者）は国家となりました。〈生ける文書〉（教皇）はより抽象的、可塑的、中立的なものになりました（宗教の衰退と〈国家〉の誕生）。

世界の近代化とはキリスト教への改宗、征服であり、世俗化とはこの世界を西洋化するための決定的な道具であるといえます（ルジャンドル）。解釈者革命によるテキストの客観化＝情報化は、最終的に〈国家〉を掃討する。

以上の説明は佐々木中『夜戦と永遠 フーコー・ラカン・ルジャンドル』によります。

ひねもす無為はここに  $0^\infty=1$  ( $0^\infty$ システム) の樹立を見ていました。仮止め、仮固定<sup>33</sup>をする解釈者が抽象化、水平化することで如何様にも解釈が許され開かれるようになった。これが許されるようになった素地として、精霊、キリストという媒介、0と $\infty$ から1が導かれるというイエス信仰があったのでは、とひねもす無為は考えているようです。イスラム教の式 ( $1/\infty=0$ ) → 仏教の式 ( $1/0=\infty$ ) → キリスト教の式 ( $0^\infty=1$ ) という規範のシフトがあったと。

**画家：**だからこそ、私たちはあいだの思想に用心深くならねばならないと。2つのあいだがある。

**アルバイト：**ざっくりいうと、コード、倫理規定としてのあいだと真理としてのあいだ？

**学生：**ダニもロボも中間地帯にいる。ただそれは生きているわけではなかった。眠っている。深い眠りについていて。中間地帯は確かにある。ただ中間地帯にいながら生きることはできない。中間地帯で生きていると思込んでいる者がいるだけで、そうした場はすでに中間地帯ではない。コード化された中間地帯、あいだの領域は不可能であることに無自覚であるということでしょう。不可能を可能と言うことで、屑を量産し続けるのが、官僚制、資本主義体制ではないでしょうか。そこで量産された屑こそがコード化された中間地帯における中間地帯を垣間見させるものではないでしょうか。

**浮浪者：**涅槃寂静の境地はない、というね。

**画家：**涅槃寂静の境地はある、悟れという社会。そうして悟った気になり悟

<sup>33</sup> 千葉雅也. 『動きすぎたはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』. 河出書房新社. 2013.

りそこねた屑が溢れていく。

**学生：**ナーガールジュナは『中論』で「ニルヴァーナは有に非ず、無に非ず」と述べていますね。また、中村元は「空を絶対視するならば、その瞬間に空は失われてしまう」と述べています<sup>34</sup>。「空を説く」というのは一つの方便であると。

**画家：**「ない」という言い方も時に方便だがわかりやすいから空とか無をわざわざ日常生活でわけたりはしないわけだね。

**学生：** $0\infty \neq 1$  は涅槃寂静の境地はない、と言うことですね。言うだけでは弱く、さらに具体的な定数関係を築いていく。たとえば斜めの関係を。

**画家：**私たちはもともとイロニーの中にいる。だからイロニーにイロニーを重ねるのはナンセンスだ。別の円錐を思い描く、ロボのように、そして微笑んでいる、そうした営みをいつも夢描いている。

**学生：**オープンダイアログ(OD)はイロニーに、未来語りのダイアログ(AD)はユーモアに対応しているとみることもできるでしょうか。

**アルバイト：**まず壊してくちゃくちゃにして、立て直すよ。

**画家：**そもそもが急性期はくちゃくちゃになっているわけだから、くちゃくちゃになっているところへモードが採用するコードが強制力として働くがゆえに、人は病むのだろうし、OPはそうすると、くちゃくちゃをくちゃくちゃのままにしておく、モードのコードを介入させないことでやまいを析出させない、出来事をやまいとして析出させない、結晶化させないということかもしれない。それが保護的に作用する。

**学生：**出来事を出来事のまま眺める、関係者すべての視点から眺める。不確実性に耐える、結論を急がない、というのは出来事に名を与えないということでしょう。

**アルバイト：**比喩ではなくそのものを語るのですね。花を花として、山を山として、顔を顔として。

**画家：**解釈を許さない。

**浮浪者：**踏み越える、ただ一人ではなく、全員で踏み越える、ということかもしれない。

**画家：**そして分節(II)へのシフトがADというわけか。別様に生きるために。

---

<sup>34</sup> 中村元、『龍樹』、講談社、2002。

**アルバイト**：ドゥルーズは *différent/ciation* という表記によって差異のもつ2つの様相を示したといえます<sup>35</sup>。*différentiation*（差異化、微分）とは、未分化な状態で力がひしめく生成のプロセスを指しおり、他方、*différenciation*（分化）とは、プロセスが収束して組織化された状態のことであると。それぞれ「こと」と「もの」、「生成」と「存在」と言い換えることもできるといいます。またそれぞれの差異のとらえ方を、*impliquer/explicuer* という対によって表わしているそうです。*Impliquer* とは差異のうごめくプロセスに内在し、その中に含みこまれている意味を感じ取ることであり、他方、*expliquer* とは、襷（*pli*）を押し広げることであり、そこに光を当て、明確に象ろうとするものであると。

差異を微分に引き付けて、*impliquer* し、分化させ未来を象る、そうしたプロセスが OP と AD の中にあるのではないのでしょうか。

**画家**：顔を見るととき、小説を読むとき、そこにいきなり表象をみるのではなく、まず微分的に眺め、読み、一度開く。ただ開きっぱなしではお話が進まないのととりあえず表象に落とし込み、落とし込みながらロボのように別の円錐に思いを馳せ懐かしそうな笑みを浮かべる。

**アルバイト**：内海健は同じ論文の中で *sympathy* と *empathy* という2つの共感の違いについての述べています。*sympathy* と *empathy* はそれぞれ *impliquer* と *expliquer* に対応するでしょう。発達障害は *empathy* は苦手であるが *sympathy* には鋭敏であると。

**学生**：用語の使用法が書き手により異なるところがありますが、ドゥルーズが統合失調症と考えていたものは現在の発達障害、自閉症スペクトラム障害（ASD）に近く、ラカンの統合失調症も同様で、ラカンのいう倒錯者は統合失調症気質、シゾイドと考えると腑に落ちるところがあります。

**むすんでひらいて**

**学生**：「むすんで ひらいて 手をうって むすんで またひらいて 手をうって、その手を 上に」という童謡がありますね。私たちはそれと同じことをしています。

**アルバイト**：開いているだけではなく、結んで開いてまた閉じてと。

<sup>35</sup> 内海健、「差異と同一性—ドゥルーズ的変奏による ASD の精神病理」. 鈴木國文他(編).『発達障害の精神病理 I』所収, 133-161. 星和書店. 2018.

学生：活動は結んで開いての繰り返しですね。私が今考えているのは、寺子屋、図書館、カフェ、バー、子ども食堂です。すべてやりたいですが、どこまでできるか。

アルバイト：次は具体的な活動報告ができればいいですね。時期が来たら？

学生：そうですね。おっしゃる通り、いまがまさにそのときなのでしょう。ウイルスという生命でもなく生命でないのでもないようなもののあいだで、私たちは一度しっかり開く必要がありますね。

浮浪者：閉じるために。

### 水平関係から斜めの関係へ

学生：アラン・エレンベルグは現代は自律社会であるといいます<sup>36</sup>。

以下少し長いですが引用します。

「自律は第二次世界大戦以降、先進社会における集団的憧憬となりながらも、価値ヒエラルキーにおいてはなお従属的地位を占めてきた。この時代はおおよそ黄金の三十年（1945年から1973年の高度な経済成長時代を言う）に当たるが、それは、大衆が自身の身体と運命の所有者であると宣言し、己れの憧憬に従おうとする新たな力動が優位となり、失敗の影が薄くなるような道徳の社会へと我々が突入した時代でもある」。

「1970年から1980年の間に自律は次第に共通の条件」となり、「規律は自己規律へと向かった」。

「規律社会においては、個人差は小さく、自律社会においては、個人差は大きい」。

「過去には個人を御しやすい道具にすることこそが問題であったが、今日では、個人の自己活性化、自己制御の能力こそが問題になる」。

「1975年以来進展してきた『新たな病態性』は主に行動的なものである。行動上の健康という概念が、幼児から若年成人に至るまでの健康対策の概念の中で新たな意味を持つようになった。以来、社会的、発達的な問題が小児科

---

<sup>36</sup> アラン・エレンベルグ. 「メンタルヘルス 自律条件下の社会関係と個人差」. 鈴木國文他(編). 『「ひきこもり」に何を見るか グローバル化する世界と孤立する個人』所収, 45-61. 青土社. 2014.

学の中心に置かれるようになった」。

「子供の病理を出発点に成人の病理を同定し、早期介入の政治的必要性を強調する発達論的な接近法を通して、疾患に対する戦いモデルからヘルス・ケア・モデルへの変容が遂げられたのである」。

「新たな病態性と新たな健康、それは行動であり、行動とは個人の自律である」。

自己制御は内へと停滞し、内向する方向と外へと逸脱し、氾濫するという二つの方向に障害を被る。「言い換えるなら、社会化の失敗は、社会的ひきこもりと多動がそれぞれ具現化する二つの大きな様式に従って生じることになる。社会的ひきこもりは自己活性化の不十分さと自己制御の過剰によって引き起こされた失敗した行為であり、焦燥的な興奮（多動）は、自己制御の不十分さと自己活性化の過剰によって引き起こされた、逆方向の失敗した行為である」。

**アルバイト：**自律社会において、人は自己制御と自己活性化のあいだで上手くバランスを取ることを求められている。バランスを上手くとれない人、とらない人はひきこもりや多動として異常の烙印を押される。一側原理に生きる発達障害もこのバランス不全として析出してきた病態といえるのでしょうか。

**学生：**0 と∞のあいだでバランスを上手くとり、効率的に生産し続けること、こうしたバランス感覚を備えた人間を推奨する社会が自律社会なのでしょう。

**画家：**少しでも外れるとKY（空気が読めない）などと言われるわけだね。すでに少し古いか。

**浮浪者：**過剰と過少のあいだを生きよ、というわけですね。もうそろそろ、はっきりとこう言ってもいいかもしれません。過剰と過少のあいだを生きることなどできないと。あいだを生きることができるなどと思うのはいい加減やめにせよと。あいだは確かにある。しかしあいだに踏み止まることはできない。私たちは踏み越える。

**画家：**その都度小さく踏み越えながら、屑を見ないふりをして、またあいだに留まっている気で踏み越えている。それもろくでもない踏み越えを繰り返している。

**学生：**だから踏み越えるかどうか、ということではなくどう踏み越えるか、ということ、でしょうか。踏み越えながらフラットでいるつもりではなく、垂直関係でも水平関係でもない斜めの関係を構築するような、定数関係の踏み越えを重ねていく。中間地帯は確かにあるが、そこに留まること

はできないのだから、そうであればこそ、具体的なほどよい権力関係を模索したほうがずいぶんとましだろうと。

**浮浪者**：開くのは閉じるため。

**アルバイト**：開かれを生きることにはできないですね。

**画家**：むすんで ひらいて 手をうって むすんで。

**アルバイト**：哲学でひらいて、アートでむすぶ。そんな感じでしょうか。

**学生**：雑な感じがいいですね。 $0^\infty=1$  というコードは常にあいだを生きようとする、生きることが可能とするコード、悟れと命令するコードでした。それは不可能であるとする、根拠の根拠はないと否をつきつけること、 $0^\infty \neq 1$  (不定) であると言うこと、不可能としてのあいだを肯定すること、あいだは垣間見ることしかできない、と言うこと、不可能なものとしてのあいだを肯定する、それが多様性を肯定することになる、多様性を消費するのではなく多様性を多様性そのまま肯定することにつながる。多様性という抽象に留まるのではなく、具体的な多様性をその都度、 $A/B=C$  という形で刻むこと、それが本来のあいだの機能を取り戻すことだろうと思います。

**アルバイト**：悟れないと悟ることでしょうか。

**画家**：だけではなく、別様の生のリズムを刻むことか。そこにはより高次の生などない。

**アルバイト**：別の円錐に移行する。ロボのマリアがしたように。そこにそつと人間を忍び込ませる。その繰り返し。

**学生**：ある患者の家族がみんな忘れるために書くんや、と言っておりました。生きるために。書くことは忘れることだと。

**浮浪者**：忘れるために夢を見る。忘れるために話をする。

**アルバイト**：ダンスをする。ステップを刻む。

**画家**：忘却がなければ、時間も立ち現れることがない、時間が立ち現れないということは空間もまた立ち現れない。

**浮浪者**：しかしこんなことは本当はすべてどうでもよい。本当に、まったくもってどうでもよいことだ！

**アルバイト**：お腹が空きましたね。

**画家**：そろそろピザは焼けたかな。

**学生**：もうすぐです。

(2022/04/27)

## 参考文献

- 國分功一郎. 『中動態の世界 意志と責任の考古学』. 医学書院. 2017.
- 伊藤亜紗・角幡唯介. 『ケアと狩りから考える「わからなさ」ゆえの信頼』. 朝日新聞. 2022/01/01.
- 高桑和巳. 『哲学で抵抗する』. 集英社. 2022.
- 柴山雅俊. 『解離性障害—「うしろに誰かいる」の精神病理』. 筑摩書房. 2007.
- 中井久夫. 『治療文化論: 精神医学的再構築の試み』. 岩波書店. 2001.
- 井筒俊彦. 『意識と本質—精神的東洋を求めて』. 岩波書店. 1991.
- ジョルジョ・アガンベン. 『開かれ—人間と動物』. 岡田温司・多賀健太郎(共訳). 平凡社. 2011.
- 臨床文藝医学会理事. 「祝祭と零れ落ちたもの」. 『臨床文藝』1(2021): 14-20.
- Rovelli, Carlo. “Forget time”: Essay written for the FQXi contest on the Nature of Time. *Foundations of Physics* 41 (2011): 1475-1490.
- 名郷直樹. 『いずれくる死にそなえない』. 生活の医療. 2021.
- ジャック・ラカン. 『不安』. 小出浩之他(共訳). 岩波書店. 2017.
- ひねもす無為. 「鈴木國文著、『同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダンをどう生きるか』」. 『京都アカデメシア』. 2016年2月5日. 最終アクセス 2022年4月27日. [https://kyoto-academeia.sakura.ne.jp/book\\_review/id74/](https://kyoto-academeia.sakura.ne.jp/book_review/id74/).
- マリー=エレヌ・ブルース. 「ラカンのディスクール理論からみた普通精神病」. 松本卓也(訳). 『ニュクス』1, (2015): 188-201.
- 鈴木國文. 『同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダンをどう生きるか』. 中山書店. 2014.
- 中井久夫. 『臨床瑣談 続』. みすず書房. 2009.
- 中井久夫. 『徴候・記憶・外傷』. みすず書房. 2004.
- 神田橋條治. 『治療のこころ 第二巻 精神療法の世界』. 花クリニック神田橋研究会. 1997.
- ジョルジョ・アガンベン. 『到来する共同体』. 上村忠男(訳). 月曜社. 2015.
- 春木奈美子. 『現実的なものの歓待: 分析的経験のためのパッサージュ』. 創元社. 2015.
- 角幡唯介. 『狩りの思考法』. 清水弘文堂書房. 2022.
- カルロ・ロヴェッリ. 『時間は存在しない』. 富永星(訳). NHK 出版. 2019.
- 島田虎之介. 『ロボ・サピエンス前史』. 講談社. 2019.
- 大澤真幸. 『不可能性の時代』. 岩波書店. 2008.

樫村春香. 「ドゥルーズのどこが間違っているか?—強度=差異, および二重のセリーの理論の問題点」. 『現代思想』(青土社)24, (1996): 174-93.

中井久夫. 『統合失調症 2』. みすず書房. 2010.

臨床文藝医学会. 「Line 座談会〜ケアについて〜」. 『臨床文藝』1, 2021: 26-38.

中村哲. 『わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」 中村哲が本当に伝えたかったこと』. NHK 出版. 2021.

『小公女セーラ』. 日本アニメーション制作. 1985.

佐々木中. 『夜戦と永遠 フーコー・ラカン・ルジャンドル』. 以文社. 2008.

千葉雅也. 『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』. 河出書房新社. 2013.

中村元. 『龍樹』. 講談社. 2002.

内海健. 「差異と同一性—ドゥルーズ的変奏による ASD の精神病理」. 鈴木國文他(編). 『発達障害の精神病理 I』所収, 133-161. 星和書店. 2018.

アラン・エレンベルグ. 「メンタルヘルス 自律条件下の社会関係と個人差」.

鈴木國文他(編). 『「ひきこもり」に何を見るか グローバル化する世界と孤立する個人』所収, 45-61. 青土社. 2014.